
ラストティーン

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストティーン

【Nコード】

N7780U

【作者名】

やしろ

【あらすじ】

19歳と20歳は、全然違う。「子ども」でいられる最後の夏に、10年前の両親の離婚によって離れ離れになった元・きょうだいと一緒に過ごす、自分自身を見つめるお話。

キットカットな関係

年も同じ、誕生日も同じきょうだいに、周りの人たちは口々に言う。「君たちは、双子なんだろう?」と。

きょうだいは首を振る。「僕たち、三つ子なんです」と。

あ、なるほどねえ。盲点だよ、それ。たしかに、双子じゃないもん、嘘は言っていないよなあ。

と、一人頷いてから、私と忍の関係を考えてみる。

年も同じ、誕生日も同じ。私たち二人をきょうだいだと知ると、周りはやっぱり口々に言ったものだった。「双子なんでしょう?」と。顔は全然似てないけど、世の中にはそんな双子、いくらでもいる。だから、私たちもそんな双子に思われても仕方ない。事実、私もずっとそう思っていたというか、息をすることにいちいち意識を向けないのと同じ、当然のこととして、考えたこともなかった。忍と私は、血のつながった姉妹なのだと。

「父さんな、母さんと離婚するから」

父さんが、幼い私を傷つけまいと、あくまでも優しく、穏やかにそう切り出したときは、内心来るときが来たんだなと思った。すれ違い、という単語は案外どこにでも転がっているということを知らないほど、私は幼いつもりはなかった。それに納得出来るかどうか、というのはまた別の問題なんだけど。

とにかく、私は父さんと母さんがもう同じ家で暮らさないこと、たぶんもう二度と会わないであろうことも、理解した。父さんは私を傷つけないようにと気を使いながらも、使う単語はどれも呆れるほど直球だった。遠回しな言い方が苦手な人だったのだ。父さんの、優しい声色と出てくる言葉の鋭さのギャップに着いて行くのに、私は必死だった。

父さんは、これから先も私を育てる言った。難しい言葉で言えば、親権を取ったということだろう。ドラマでやっているような生々し

い言葉が父さんから出てきたときは、さすがに泣きそうになった。
「だから、忍ともお別れしてな」

父さんのこの一言で、私はたった今出そうになっていた涙の理由を、思わず忘れてしまった。

どうして、私と忍が？

啞然としている私に、父さんはやはりオブラートなど欠片もない言葉で、優しく教えてくれた。

母さんも親権がほしいということ。父さんも親権をほしがっていること。子どもは、二人いること。育てる親も、あら偶然、二人いるね。

2÷2＝1。父さんの残酷なまでにわかりやすい言葉は、私に実にシンプルな事実を示してくれた。

でも、私と忍はきょうだいでしょ。そんな、小学生が解くような数式に当てはめて考えていいことなの？

キットカットを半分こにするような気軽さで進んでいく話に、私は目眩がした。

ドラマで、いかにも悪役面の俳優が言っていた。「夫婦なんてな、しょせん他人なんだよ」と。私は、そう言い捨てたときの名前も知らない俳優の顔が、口の動きに合わせて醜く歪んだことに目を奪われて、正直、セリフの意味をちゃんと捉えていなかったけど、案外覚えていたものらしい。夫婦は他人。納得出来るかどうかはやっぱり別問題だけど、理屈はわかった。父さんと母さんは、もとは他人だったから、また他人に戻るべきが来たのだと。

でも、私と忍はそうじゃないはずだ。血がつながっているんだから、他人じゃないんだから、だから、これから先も他人になんかなりっこない。離れ離れに暮らすなんて、父さんと母さんみたいにもう会わなくなるなんて、そんなの理解出来るはずない。納得なんて、絶対に出来ない。

私の、言葉にならない抗議は父さんにも予想がついていたようで、ちゃんと説明してくれた。

「恵と忍は、本当のきょうだいじゃないんだよ」

父さんは、包み隠さず、幼い私にもわかるように教えてくれた。事実が、どれだけ私に大きな衝撃を与えるかまで考えるというのは、父さんには酷な話だろう。父さんは、嘘はつけない。変化球なんて無理なのだ。ピッチャーとしては致命的だけど、父親として失格だと言えるほど、私は年を重ねていなかった。

父さんの話をまとめれば、こうだ。

私と父さんはたしかに血がつながっている。忍と母さんも、正真正銘の親子。

父さんと母さんはそれぞれ同じ年の子どもを連れたまま結婚したんだそう。つまるところ、私と忍は、父さんと母さんが夫婦だからこそきょうだいという、本来はつくはずのない冠をお互いに見ながら育ってしまった。

忍は他人。父さんと母さんが、もとは他人だったように。来るときに来たから、また他人に戻る。

血がつながっていないとか、他人という単語を連呼する父さんの顔は、あのとときの俳優のように、口元が歪んでいた。震えている、と言った方が正しいのかもしれない。

ストーリーも、俳優がそのセリフを口にするに至った脈絡も忘れてしまったけど、私は唐突に、その俳優が実は見せていた態度ほど余裕を持てていなかったんじゃないかと思った。

そうじゃなきゃ、今の父さんと同じような表情になるはずがない。父さんは、事実には忠実に着いて行くことが出来るほど、強くないのだ。今だって、自分の出した言葉に、自分でダメージを受けている。幼い私を、そして自分自身を、現実という動かせない障害物から少しでも回避させてダメージを軽くさせることが出来るほど、器用ではないのだ。

私は頷いた。何に対してなのか、自分でもよくわからなかった。でも、小学生の私でもわかる理屈がちゃんとあって、父さんが傷ついていて、私が父さんを責めることでは誰も楽にならないことがわ

かっていたから、そうした。重力に促されるまま、顎を引いた。視線は下がる。

私と忍は、年も誕生日も同じ、きょうだい。

でも、双子じゃない。まして三つ子でもない。

それは、私と忍が、もとは他人だから。

キットカットはもともと一つにくっついていてるけど、私と忍はそもそもくっついてすらいなかったのだ。

キットカットを割るよりもずっと自然な流れで、私と忍は他人に戻った。

キットカットな関係（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました！

試行錯誤を繰り返すことになりそうですが、温かく見守っていただければ幸いです。

手紙に関する一考察

時代の流れとは、読んで字のごとく、本当に川のように流れて行くんだなあ、とそんなことを考えた。

フロッピーディスクが博物館行きになる、というのがあながち笑えない現実になりつつある今、同じく時代と言う、逆らい難い川の流れに追いやられてしまったものを、私は今、手にしている。

全国共通のデザインの80円切手の貼られた、可愛らしい封筒。業務用に使われるような無骨な茶封筒ではなく、外見重視のレターセットのものだ。メールがシニア世代まで浸透したこの国じゃ、もはや旧世紀の遺物、博物館の住人のポジションに甘んじていると言っているいいんじゃないかな。

とまあ、久しぶりに目にしたレターセットにばかり目を向けることで、私は肝心な事実から目を逸らそうとしていた。

「梶山恵様」

丁寧な字で書かれた宛名は、まさしく私に向けてのものだった。私の部屋のポストに入っていたのだから、当然だ。

しかし、問題は差出人の名前だ。

「見原忍」

控えめに、隅に書かれた名前に、私はため息をついた。

困ったなあ、の意味でもなく、おいおい勘弁してくれよ、の意味でもない。

自分でも正体のわからない感情が、吐く息に乗って出てきたとしか言いようのない、あまりつく機会のないため息だった。

見原忍。そうか、もうとつくの昔に、梶山忍じゃなくなってるんだもんなあ。

手にしたものの、なかなか開封するふんぎりがつかず、私は取りとめのない思考にふけりながら、私に開けられることを待っている手紙をとりあえず意識から外す。

見原忍。10年前まで、私のきょうだいだった子だ。

両親の離婚をきっかけに、私たちは戸籍上、他人になった。別れて以来一度も会っていないことも踏まえると、距離の意味でも他人と言えるんだろう。

そんな関係になった忍が、どうして私に。10年も経った今、何を伝えたいんだろう。

もしかして、母さんのこと？

忍の手を引いて出て行った、10年前まで母さんだった人の背中が浮かんだ。

母さんの身に何か起こったのなら、たとえ何年経とうと、忍は私に連絡を取ろうとするはずだ。

普通は電話を寄こすところだけど、私の携帯の番号を知らないんだから、手紙にしたのか。

と、そこまで考えて、改めて首を捻った。

忍、どうして私の今の住所を知っているんだろう。

私は今、実家というか、父さんのもとを離れて一人暮らしをしている。通う大学が県外だったからだ。

忍は、どうして私の住所を知っているんだろう。

疑問には思っただけど、今は大して重要なことじゃない。

母さんの身に何か起こったかもしれないのだ。とにかく、読んで状況を把握しなくちゃ。

可愛いシールの貼られた開封口を避け、端から破る。

急いで目を通そうとした、その動きが一瞬止まる。

自分の眉がぐいぐい寄って行くのをはつきりと感じながら、予想していたものとかけ離れた内容の手紙を、黙って読んだ。

梶山恵様

久しぶり、元気だったかな？ボクは元気です。

10年も会ってないから、ひよつとしてボクのこと忘れちゃってるかな、ってちょっと心配だったんだけど、こうして読んでくれてるってことは、覚えてくれたんだね。よかった。

まあ、どうせケイちゃんのことだから、母さんの身に何か起こったと勘違いしてこの手紙を開けたんだろうね。ハガキにしないでよかった。ケイちゃん、読まずに捨てちゃうかもしれないから、あえてレターセットを買ってきました。

いやあ、レターセットって、案外売ってるもんだね。時代の遺物、とか思ってたけど、需要あるんだね。感心しちゃった。

あつ、待って待って。まだ本題に入っていないから、お願いだからまだ破らないでね。

今回この手紙を送ったのは、ちゃんと理由があるんだ。

ケイちゃんの大学、もう夏休みに入ったよね？ボクのところも、もう入ったんだ。

そこで、ケイちゃんの一人暮らししているアパートにボクをしばらく置いてほしいんだ。

ほら、大学生の夏休みって、長いでしょ？夏の思い出を作ると思っ
て、一人くらい、ね？

もちろん、食費とか家賃とか、実費はボクも負担します。経済的な負担はケイちゃんにかけないから。

それに、食事とか家事とか、一人暮らしだといろいろ面倒でしょう？ボクがやるから、ケイちゃんは、無料でハウスキーパーを雇ったと思ってくれればいい。無料だよ。いい響きでしょう？

ね、ケイちゃんもいろいろ思うところはあろうけど、助けると
思っ
て、このお願いを聞いてほしい。

ここまで読んで、またため息が出た。

今度のは「困ったなあ」とか「おいおい勘弁してくれよ」の感情が

はつきり出たものとわかる。

ついでに、「何を考えているんだこいつは」も混じっている。

便箋には、明日の日付で、ここから近い場所にあるファミレスで私を待つという旨が書かれていた。

来てくれるまで、ずっと待っているから。

最後の行に書かれたこの一言に、私はまたため息。まったく、この短時間に何回、私にため息をつかせる気なんだろう。

嫌なら、待ち合わせに行かなきゃいい。

私と忍はもう10年も前に他人になったのだ。今さら、会って何を話せばいいのか、さっぱりわからない。しかも、一時的であるとはいえ、自分の家に泊めてやるだなんて。

あまりにも一方的な内容だし、しかも困ったことに、忍の連絡先は書かれていない。絶対に、わざとだ。メルアドでも書かれていれば、「悪いけど、無理だから」の一言ですむ。

わざわざ会わなきゃならないシチュエーションを作る忍のあざとさは、全然変わってない。しかも、19にもなって、未だに一人称が「ボク」なのか。

ホント、全然、変わってない。

ちよつと多めに息が出てきた。でも、たぶんこれはため息じゃない。だって、吐いたあと、あんまり悪い気はしなかったから。

でも、いきなり泊めてやるだなんて、やっぱり横暴だ。

私たちは他人なんだから、泊めてやる義理なんてない。

とりあえず、直接会ってから、ガツンと言ってやるんだから。

私は、忍のセンスの良さを感じさせる品の良い封筒を軽く撫でながら、この日何度目になるのかわからないため息を、またついた。

手紙に関する一考察（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。次から一人称が妹の忍に交代です。

待ち合わせに関する一考察（前書き）

今回は妹の忍が主役です。

待ち合わせに関する一考察

何事にも、「ふさわしい」場所があるのだと、お母さんはよく言っていた。

たとえば、初デートでの待ち合わせなら、ちょっとおしゃれなカフェ。相手を待っている間に座っていられるから、待つことがストレスになりづらいし、何より会った時点ですぐにお茶できる。アイスコーヒーで喉を潤してから、街へ繰り出す。うん、なかなか無難なスタートを切れるね。

事務的な用事で、嫌いな相手と一日一緒にいなきゃならないときの待ち合わせなら、駅かな。遅れたときの言い訳がしやすいし、人が大勢いるから、会ってから最初に来るであろう沈黙も、うまいことかき消される効果が期待できる。

ま、全部お母さんの受け売りだから、本当のところはわかんないんだけどさ。

それじゃあ、10年間会っていないきょうだいとの待ち合わせは？こんな待ち合わせのパターンを考えることになった人って、いったいどれくらいいるんだろうね。考えて、ちよつと笑えた。お母さんだったら、何て言うかな、なんて。

今回 Кейちゃん と会うことを、お母さんには言っていない。ボクだって、もう大学生なんだから、いちいち親の許可を取ってから外出する必要なんてない。

言ったら、怒るに決まってる。怒って、黙るんだ。お母さんは、自分の感情を、制御出来なくなるほど高ぶらせると必ず黙ってしまう。目も合わせない。普段の、取引先をあれよあれよという間に丸めこんでしまうような饒舌ぶりと、スーツの似合うキャリアウーマンぶりからは想像もつかないほど、怒ったお母さんは子供じみている。いい年した大人が子どもに転じる瞬間を、ボクは好ましく思っていない。ぶっちゃけ、鬱陶しいとさえ思う。人は、年と共に、戻れない。

い成長をしていくべきだと思うから。

と、そこまで考えてみて、ボクは一人笑った。

ボクもケイちゃんも、10年、年を取った。お互い、外見もかなり変わっているだろう。会ったとして、お互いがわからないなんてことも充分にありえる。

いや、そもそも来ない可能性の方が、ずっと高い。

窓際の席で一人頬杖をつき、窓へと視線をやる。笑った顔のボクと目が合う。

こりゃ、来ないなんて欠片も考えていない顔だな。

そう思つて、窓に映った顔にまた笑顔が広がる。

ケイちゃんに宛てた手紙に、ボクへの連絡先は載せなかった。

ケイちゃんは、昔から人と目を合わせるのが苦手な子だった。

作文は得意だったけど、とにかく一対一の直接的な接触到抵抗があるみたいで、思ったことをうまく言葉に出来ないくらいがあった。

だから、会いに来てさえくれれば、絶対に首を縦に振らせる自信があった。ケイちゃんには悪いけど、ボクにもちゃんと理由があるんだ。10年分のブランクに、あえて踏み込む、理由が。

ケイちゃん、来てくれるかな。

傍らの空席に置いた荷物を見やる。すでに、泊めてくれることを前提に荷物は持ってきた。少量ではあるけど、一人で入るファミレスに、この荷物はちよつと浮く。このまま待ちぼうけで出なきゃならないとしたら、なおさら。

頭では、そうわかつているものの、ボクは自分の口元に浮かんだ笑みをしっかり自覚していた。

大丈夫。ケイちゃんは、必ず来てくれる。

おおかた、面と向かつて断ろうという算段なんだろうけど、知らんぷりを決め込んで誰かを待ちぼうけにさせたりなんてしない。絶対にしない。

ケイちゃんは、そういう子だ。肝心なところで、優しい。

誰かの入店を告げるベルが鳴る。BGMに紛れてしまうような控え

めな音だけど、店員と、待ち合わせのいる人間にとっては聞き逃し
ようなない音。

やっかいな問題を抱え込んだように、眉を寄せ、堅く唇を結んだ女
の子が入ってくる。

ボクは、その子の表情と対極な感情が自分に浮かんでくるのを自覚
しながら、手を振った。

待ち合わせに関する一考察（後書き）

読んでくださっている方がいるかどうか、正直自信がありませんが、
まだまだ続きます。次回の主役はお姉さんの恵です。

双子の魂、どこまで（前書き）

今回は恵の一人称です。

双子の魂、どこまで

「三つ子の魂百まで」って言葉、昔はよくわからなかった。昔というのは、私がまだ忍と双子だと思ってたときのこと。

三つ子とはすなわち三人同時に生まれてきたきょうだいのことだと思っていた私に、魂百まで、の正しい意味がわかるはずもない。百歳までなら、三人とも元気で生きていられるって意味だと思っていたのだ。

私たちは双子だから、ちょっと割り引いて「双子の魂八〇まで」なんて言うのかな、なんて。とんでもない思い違いだ。

無知で、幼稚で、どうしようもなくもろい、私の期待。

八〇歳までなら、私と忍は、魂をつないだまま生きていけると、そんなことを思っていたなんて。

「ケイちゃん、全然変わってないね」

向かい合って座る忍がにつこりと笑う。

「あれ？あんたもね、とか言わないの？」

どの口がそんなこと言ってるのよ、という私の言葉は、私の燃料切れによって忍まで届くことはなく、内部に留まってぐるぐると回る。流行なんて眼中にないかのような無加工のショートカットは、小首を上げた拍子にさらさらと流れ、きめ細やかな光沢を隅々にめぐらせる。

部屋着です、と言わんばかりの無頓着さがありありとわかる無個性なTシャツの袖口から覗く腕は、この季節には不釣り合いなほど白いうえに、座っていてわかりづらいはずの忍のスタイルを、嫌味なほどに主張している。

化粧気なんてまるでないのに、整った顔立ちが「これが完成品なん

です」という貫禄を漂わせている。

正直、かなりの美人だ。

男の子みたいに素っ気ない服装といい、「ボク」という一人称といい、忍が自分の性別をあまり意識していないところは昔のままだけど、今はそれも相まって忍という人間の美しさを形作っているのがわかる。

「背、伸びた？」

我ながら、バカな質問だなと思う。別れて暮らし始めたのは小学生のときなのだ。あれから、もう10年経つ。伸びないわけがない。「ちよつとだけね」

忍は、ふつと微笑んだ。微笑む、って言葉がしっくりくるような、綺麗な笑みだった。

「昔は私の方が高かったのに」

「ちよつとだけね」

「おかしいわよ。あんた、あんなに牛乳嫌いだったのにさ。私なんて、今でも毎日飲んでるのよ。その私を抜くってことは、当然飲めるようにはなったってことなのよね？」

「ちよつとだけね」

「だいたい、痩せすぎ。昔から細い方だとは思ってたけど、今のあんた、ゴボウだよ、栄養通ってないのよ。どうせ、気が向かないとか言って、食事抜いたりしてるんでしょ」

「ちよつとだけね」

「だいたいね、非常識なのよ。今日は、その、たまたま暇だったから直接会って断ろうと思って来たけど、普通来ないよ。10年も会ってないんだから、当然でしょ。非常識よ、自覚してんの？」

「ちよつとだけね」

「何かあつたんでしょ」

忍は、ふいに黙った。顔にはさっきまで浮かべていた笑みの名残りが張り付いているけど、口の端がちよつと震えている。

そついうとこ、お父さんそっくり。血は、つながってないのにね。

「ちょっとだけね」

忍は、それだけ言った。

わざとらしい笑い方すんの、やめなさいよね。その笑顔、あんたが思ってるほど、何も誤魔化せてないんだから。

「ちょっとだけね」

今度は、私が言った。忍は、何も言わない。

「あんたが、変わったと思った。まあ、そりゃ、外見が変わってるのは当然のことなんだけど」

三つ子の魂百まで。その言葉の意味、今ならちゃんとわかる。3歳までに出来あがっちゃった人格は、死ぬまで変わらないってね。

間違っても、ずっと仲よしこよしで生きていけるって意味じゃない。忍、あんたはちゃんと変わった。私を頼りたいと思ってるくせに、その理由は打ち明けない。秘密主義ってわけ？昔みたいに、なんでも共有出来るはずがないってわけ？まあ、それが普通だよ。私、今のあんたのこと、何も知らないもん。

昔の記憶の断片をかき集めても、今のあんたにはならない。それは、わかる。わかるからさ。

「私はあんたの言うとおり、ちつとも変わってないから、だから、ちよつとの間だけ、あんたの変わったところを見ててもいいかなって、思う」

忍から、貼りついた笑みが消えた。

「忍、なんて顔してんのよ」私は笑ってやった。「鳩が豆鉄砲喰らったら、今のあんたになるわね」

忍は、ふいに目を逸らすと、ふてくされたようにつぶやく。

「うまくやるつもりだったのに」

「は？」

「ケイちゃん、人の頼み断るのとか、苦手だから、だから、うまく丸めこんでやろうと思ってたのに」

「失礼ね。人をダンゴムシみたいに」

「なんか、すごく大きい借りを作っちゃったのかも」

「馬鹿ね。かも、じゃなくて、実際その通りなのよ。しっかりと働きなさいよ」

ついさっき顔を合わせたとき、私たちの表情は交換したみたいに真逆だ。

でも、思ってることは、きっと同じ。

魂をつないだまま生きていくことなんて出来ないけど、お互いに歩み寄ることは、たぶん不可能じゃない。

三つ子の魂百まで。

双子じゃない私たちは、どこまで変わっていけるかな。

双子の魂、どこまで（後書き）

読んでくださってありがとうございます。・・・って、このメッセージまで辿りついた方がいらっしゃるかどうかは、毎回疑問なのですが。

似ているボク、知らないキミ（前書き）

今回は忍の一人称です。

似ているボク、知らないキミ

誰よりも早く起きて、自分の食べない分までご飯を作って、寝ぼけまなこをこすって起きてくる家族に無償で、何もかも整った朝を提供するのが母親の仕事なのだとしたら、ボクはまさにこの家の、ケイちゃんの母だ。

「おはよう、ケイちゃん」

ケイちゃんの手を遮るように先制。につこりと笑えば、ケイちゃんは神妙な顔になった。

「本当にご飯、作ってくれたんだ」

「そういう約束でしょ？ボク、こういうのけっこう得意だから、心配しなくていいよ」

フライパンを傾け、こんがり焼き上がった目玉焼きを白い皿へとスライドさせる。フライ返しはなかった。ケイちゃん、オムライスとか作らないのかな、ないとけっこう不便だと思うんだけどなあと考えながら作れば、いつの間にかあんなにぐっすり眠っていたケイちゃんも自力で起きる時間になっていたらしい。

「はい、ちゃんと食べて力つけてね。今日、学校なんだっけ？」

「うん、まあ」

「てつきり夏休みだと思ってたけど、まだテストが残ってたなんて大変だよ。あ、ちゃんと黄身は固めておいたよ。好み変わってたりしないよね？」

「よく覚えてるね、好みとか」

ケイちゃんは相変わらず神妙な顔のまま丁寧に手を合わせ、「いただきます」と言ってから箸を取る。

ボクもそれに倣ってちゃんと手を合わせる。二人分の動作があるわりに、この部屋は驚くほど静かだ。

昨日、ケイちゃんの部屋に入った。招かれたというべきなんだろうけど、ボクは間違ってもお客様なんて身分ではない。居候というか、無料のハウスキーパーというか、とにかくちゃんとした身分はないのだ。

そこは忘れちゃいけないなと思いながら入ったものだから、「掃除が楽そうだな広さだね。うん、学生の部屋の見本だよ」とか「この家賃、さぞお得でしょう？」なんて正直な感想は口に出さないでおいた。間違っても、「なんか、狭いね」などとは言っていない。

「狭いからね」

玄関から部屋の隅まで6歩で到達してしまったボクに、ケイちゃんは無愛想に言う。

後ろめたく思っているんだな、となんとなくわかった。自分のテリトリーのマイナス要素を見られたんだ、恥ずかしいに決まってる。

ケイちゃんの照れ隠しのヘタさに、ボクは今さらになって自分の子どものような身勝手さを恥じた。

「ごめんね、無理言って押しかけるようなことしちゃって」

「でも、出ていく気はないんでしょう？」

引きつった笑顔を張りつけて何も言えないボクに、ケイちゃんは「別にいいよ」と素っ気なく言った。

「私が泊めるって言ったんだから、追い出したりしないわよ」

当面の間はね、と付け加えてから、からかうように笑ったケイちゃんは、ふと思いついたように表情を戻してから「だから、延長には必ず私に理由を言うこと」と付け加えた。

目が合う。大きくて、とても綺麗な目だ。色素が薄いらしく、普通よりずっと茶色がかっている。

日に照らされると透き通るように金色に近づくこの目を、ケイちゃんは嫌がっていた。昔、クラスメイトに気味悪がられたそうだ。

綺麗な目だ。そして、ちよっと怖くもある。

こっちの思惑なんて全部見抜いていそうな怖さ。

ケイちゃんの目を気味悪がったという当時のクラスメイトも、たぶ

んボクと同じ理由で目を逸らしたんだろう。

でも、ボクはもう目が何かを見通すなんて錯覚を信じる年ではないから、「理由？そんなの、ケイちゃんはずっと一緒にいたいからさあ」とおどけて笑う。

蛍光灯に照らされたケイちゃんの茶色の目は、ボクの本音をどこまで読みとれたんだろう？

伏せ目になったケイちゃんの目からは、何も読みとれない。

「ごちそうさま」

食べ始めたときと同じようにきちんと手を合わせるケイちゃんに、ボクは「お粗末さまでした」と言う。

「どうだった？おいしかった？」

「うん」

「嫌いなものとかあったら言ってね。極力、避けるから」

「うん」

「今日は買い出しに行こうと思うんだけどさ、近くにおすすめのスーパーとかある？ほら、ポイントカードとか持つてるなら、それも預かった方がなにかと都合がいいでしょ」

ケイちゃんは何も言わずに黙ってボクを見ている。

「ケイちゃん？」

「不思議だなんて、思ったの」

ケイちゃんは独り言のようにつぶやいた。

「忍、お父さんみたいだから」

おとうさん。ボクが使わなくなった単語だ。そっか、ケイちゃんは使っただよね。

「お父さん、普段朝食とか作ってくれたんだ」

「ううん、料理は私の担当。そうじゃなくて、忍がお父さんみたいだなんて」

お父さんみたい。それって、ボクのどんなところを指して言ってい

るんだろ。

「血、つながってないのにね。忍とお父さんって、似てるよ。自分じゃわかんないだろうけど」

ケイちゃんはそれだけ言うのと立ち上がり、出かける支度を始める。いつてきます、と出ていこうとするケイちゃんに、ボクはまとまらない思考回路で口走っていた。

「お父さんのこと、好き？」

自分でも何を言いたいのかわからなかった。

ただ、ケイちゃんの開けたドアから差し込む朝日がケイちゃんの色を金色にしている、それに焦ってしまったんだと思う。

何もかも見透かされてる。そんな焦りに駆られて。

「好きだよ」

ケイちゃんはドアから足を一歩踏み出してから、一度振り返ってから言う。

「忍と同じくらいに、ね」

ドアは閉められた。狭い部屋には、もはや何の音もない。

「それじゃ、答えになってないよ・・・」

ボクの声が、やけに頼りなく部屋に残った。

似ているボク、知らないキミ（後書き）

お疲れさまでした。伏線と言つにはあまりにもお粗末ですが、なんとなくでもこの二人の家庭環境を覗いてもらえたなら幸いです。

似ていない色（前書き）

姉・恵の一人称です。

似ていない色

信号機の色というのは、人間が持っている「色」に対する潜在意識とわりと強く関わっている、らしい。

難しい言葉で考えるとしまいちピンとこないけど、要は「赤」というのは人間の危機意識のイメージに一番近いということだ。

危機意識だって。これも難しい言葉に入るのかも。説明しろって言われたら、正直私は小学生にもわかるように滔々と語れる自信がない。

そして、今は小学生ではなく、専門家である大学の教授にテストへの解答という形で、私は今説明を要求されている。

『新保険法と旧法の概略を説明し、その違いを述べよ』

日常会話じゃまず使わないだろうこの一文の下には、延々と空白が広がる。早い話、まったく答えを書けていないということだ。

周りの邪魔にならない程度の大きさで、ため息をつく。

大学のテストを受けるのは2年生の私にとって当然、初めてのことではないけど、この気の滅入りようにはなかなか慣れられない。選択問題が一つもなく、イエス・ノーを聞いてくれることはない。

高校までの過程と大学での違いは、模範解答が用意されていないことだとつくづく思う。

どうして戦争が起こるのか知るのが高校までの過程。

どうしたら戦争を終わらせられるのか考えるのが、大学。答えなんて、誰も持っていやしないのだ。あるのなら、とつくに世界は平和になっている。

答えのない、いや、答えがまだ見つけられていない、そんな命題を抱え、ひたすら「答え」に近づけるように迷走していく。それが、大学生の本来の存在意義だ。

存在意義、か。

自分の連想に、ちょっと笑ってしまった。

それが本当に私たち大学生の存在意義なら、この大教室を埋め尽くす学生のうち、いったい何人が自分の存在を許されることになるんだろう。

300人が入れるこの大教室は、今日はほぼ満員状態。テストを受けないと当然単位は取れないし、そうしなければゆくゆくは卒業も遅れてしまう、なんてことになりかねないから、毎回ほとんどの学生はちゃんと受けにくる。

いつもの授業ではこの人数の3割引き。ちゃんと起きていて、なおかつ携帯をいじっていなくて、隣の席に座った友だちと小声のつもりでおしゃべりに興じていない人数を引こうとしたら、半数残るかも、ちよつと危うい。

無心になってシャーペンを走らせる音と、遠くの方で無遠慮に鳴りだした携帯の着信音、不正が見つかって教室の外に連れていかれる学生の、小さいながらも緊迫した弁解の声を聞き流しながら、保険法の概略をメモ程度に解答用紙に書きだしていく。事前に復習しておいたおかげで、集中し始めればすんなりと空白は埋まっていく。

新保険法の特徴を思い出しながら文の構成を組み、判例やら学説やらも付け加えると、大きすぎるように見えた空白はあっさりと私の文字で埋まってしまった。予想していたよりもずっと呆気なかったけど、これが本当に正解なのかどうかは、自信がない。見当違いのことばかりつらつらと並べて、蓋を開けてみれば単位を落としていた、なんてことはよくあることだから、油断は出来ないけど、やれることはもうやりつくした。

すぐ隣にある窓を見る。入道雲が広がる、真夏の空だ。

ふと、忍のことを思い出した。昨日から私のアパートに居候している、元・妹の忍。

「そらいろ絵の具はね、空の色じゃないんだよ」

大教室のいろんな雑音を跳ねのけて、ぱあんと、忍の声が私のなかで閃く。あまりにも鮮明で、一瞬忍がこの教室に乱入してきて叫んだのかと思うほどだった。

窓という額縁で切り取られた、青と白だけの空。

10年前の、まだ幼い忍との記憶が、その2色に吸い寄せられるように再生される。

「ほら、水色って、青と白を混ぜ合わせたような色でしょ。なのに、水って実際は透明じゃない。それと同じでさ」

筆を片手に、パレットの上に空の色を作り出していく忍の横顔が蘇る。

夏休みの宿題で、空の絵を描いているところだ。

絵を描くのが好きな忍とは対照的に、私はその課題に全然、乗り気じゃなかったんだっけ。

お父さんに新しく買ってもらった絵の具セットの中に入っていた「そらいろ」とラベルの貼られたチューブを見つけ、これ幸いと絞り出したときのことだったはずだ。

面倒だから、この色を画用紙に塗りたくって提出してしまえばいいや、と。

「そらいろ絵の具も、空の色とは似ても似つかない色なんだよ。こんなに重い青なら、ボクなら『深海色』ってつけるけどね。この絵の具を売らした人って、ネーミングセンスないよね」

想像とかけ離れた色が出てきたことに呆然としている私に、忍はなぜか焦ったようにぺらぺらとよくしゃべる。

「ボクも初めて見たときは驚いてさあ、水で薄めたら、ちょっとはそれらしくなるかなと思っただけどさ、全然、そんなことなく。ほとんど紺色なんだもん。夜空って意味だったのかな、そらいろって。そのわりには、青が強すぎるっていうか。そう、ホント、深海って感じ。あ、ボクも深海なんて見たことないんだけどさ、イメージにこう、近いっていうか」

いつの間にか筆を置き、私に向き合ってやけに真剣によくわからないことをしゃべり続ける忍の姿がなんだかおかしくて、私はちよつと笑ってしまった。

べつに、私がそらいろ絵の具に失望しようがどうしようが、忍に非

があるわけではないのに、なんでこんなに一生懸命になってるんだろ。

忍はたぶん、弁解してるんだろう。何に対してかは、全然、わかんないけど。

「・・・ケイちゃん？」

急に私が笑い出したものだから、忍はきよんとしている。大きくて形のいい目が、マヌケに見開かれている。

「忍は、空の絵、描けた？」

笑ってしまった理由を話すのもなんだか悪い気がして、話題を変えようと、私はすぐ隣で同じように絵を描いていた忍の画用紙を覗き込む。

「・・・ケイちゃん？」

今度はいぶかしむように、忍の声はひそめられていた。私が身動きもせず黙りこくってしまったからだろう。

風の流れまで感じられるような雲が夏の太陽を目指して広がっていく構図を、濃淡のついた青が包んでいる。小学生が学校の宿題のために描いた絵とは思えないほど、美しい絵だった。

でも、私が言葉を失ってしまったのは、たぶんそれが理由じゃない。画用紙に隙間なく敷かれた青が、よく知る空の色とは全然、違う色だったから。

世界に、こんなにきれいな色があるのか。

たかが10才、世間知らずの戯言だと自分で笑うことが出来ないほど、その青には存在感があった。

同じ絵の具セットを使ったところで、誰もこんな色を出せないだろうと思った。

外に出れば延々と広がる空が世界中を覆っていても、どこを探してもこの色が見られることはないと思う。確信に近かった。

「ちよつと変な色だったかな」

私の沈黙を取り違えた忍が、今度は気まり悪そうに笑う。

「欲張って、いろんな色を混ぜたんだ」

「いろんなって・・・普通、青と白だけでしょう、空って」

なんとかそれだけ言って、すぐ近くに置かれた忍のパレットを見る。言葉通り、緑やら桃色やら灰色やら、晴れた真夏の空というモチーフとはおよそ関係なさそうな色が点々と出されている。

「うーん、まあ、たしかにそうなんだけどさ」

忍は困ったように、言葉を探している。うまく説明出来ない、という感じだった。

「青と白だけだと、混じりけがなさすぎて、きれいすぎるっていうか」

「それじゃ、ダメなの？」

私の問いかけに、忍ははにかんだように頷いて答える。

「全部ひっくるめて、仲間はすれはいけませんってこと、かな」

忍の言葉の意味するところは、正直私にはほとんどわからなかったけど、いつもそうしているように、私はわかったような顔をして頷いた。

「仲間はすれ」にされなかったたくさんの色が混じりあって、忍の「空」は、どこにもない空になった。それだけは、なんとなくわかった。

それ以来、真夏の空の「青」に、私は忍を連想するようになった。

「やめ。それでは、書くものを置いて、教員の回収を待っていてください」

教授の声が大教室に響く。

雑音が大きくなる。それでも、忍の声は私の頭からなかなか離れなかった。

そらいる絵の具はね、空の色じゃないんだよ、と。

でも、それじゃあ私に空の色を作るのは無理。わかりやすい言葉でちゃんと形がないんじゃないか、どうやって作っていいのかわからないもん。

後ろからやって来た試験官の先生が、私の解答用紙を回収していく。取られる間際に見た私の解答用紙の文字の群れは、やけにスカスカ

に見えた。さつきまでは、ちゃんと書けたような気がしていたんだけどな。

イエス・ノーで答えられない、「正解」のない問題は、これだから嫌だ。

息を吐く。やけに長く、ため息みたいになってしまった。

テストにも絵の具にも、「これだ」とわかる、たしかなノウハウがあればいいのに。

自分で一から作っていかなきゃならないなんて、途方もなくて私の手には負えない。

もう一度、窓の向こうに広がる空に目をやる。

似てないね、全然。

私がチューブから出した「そらいろ絵の具」にも。

忍の「空」にも。

それが、少しだけ、悲しいことに思えた。

似ていない色（後書き）

私の絵の具セットに入っていた「そらいろ」はやたらと暗かったのですが、これは万人に共通の思い出なのでしょうか・・・？一応周囲の人たちに確認はとったのですが、中には「ちゃんと空の色だったよ」という人もいて、絵の具セットの格を見せつけられたような気がしたものです。

そしてサイレンは鳴る（前書き）

今回は妹・忍の一人称です。

そしてサイレンは鳴る

自分はいったい何者なのか？

高校の授業中、教科書のなかでこの言葉を見つけたとき、短い間だったけど、息をするのを忘れた。

苦しかった。酸素不足、だからじゃない。体の中で血が巡っていく感覚がやけにリアルで、こんな勢いで回り続けられたら保たないという苦しさだった。

自分のなかで何かが弾けて体中を駆け巡り、外から何かを取りこむ余裕がなくなっただと、今はそう思う。冷静に分析出来てしまふほどに、あのとときの衝撃は強烈にボクのなかに残り、今もふとした拍子に蘇るのだ。

「本当に、親切にどうもありがとうねえ」

「いえ、そんな」

深々と頭を下げるご婦人の感謝ぶりに、かえって恐縮してしまう。ケイちゃんが大学に行ってしまった、特にやることもなくなってしまう。ボクは、食材の買いだしのために外に出て、このご婦人に会った。

昨日やって来たばかりの知らない町だったけど、大学周辺の地域というのは学生が多く集まるだけあって、スーパーがそこかしこにある。まずは近所の地理に少しでも慣れようと、外に出てから最初に目に入ったスーパーに入った。

買い物かごを片手に、まずは店内を1周。入口付近に貼られているチラシに目を通し、本日のお買い得品をチェックすることも忘れない。とにかく、この辺りでは何がどれくらいの値段なのか把握しながら歩き回る。

ボクの住んでいるところよりも野菜が安いなあと感じっていると、

ある一点でふと視線が止まった。それが、このご婦人だ。

正確に言うと、ご婦人の持っていたカバンの取っ手部分に巻かれた、細い飾り紐。千代紙を連想させる和風のきれいな色どりのそれは、ケイちゃんが今朝の出がけに持って行った鞆に巻かれていたものとよく似ていたのだ。

似ているっていうより、色違いなだけの、同じものなのかもしれない。ケイちゃんのは黄色が一番強く出ていたけど、ご婦人のは深い青色だった。

ご婦人に、というより、その青い飾り紐に惹かれる形で、ボクは彼女が前を通り過ぎてもしばらく突っ立ったまま見つめていた。すると、ご婦人が唐突に転んだ。

障害物など何もなく、本当に「唐突に」という感じだったから、一瞬、呆けたように動けなかったけど、立ち上がろうとした彼女の肩が、痛みに震えるようにびくと跳ねたのを合図に、ようやく金縛り状態が解けた。

「大丈夫ですかっ」

駆け寄って抱き起こす。予想していたよりもずっと軽い体は空洞を思わせ、転んだ拍子に骨が折れちゃってもおかしくないと、本当にぞっとしたものだっただ。

「ごめんなさいねえ、ごめんなさいねえ」

か細い声とは対照的に、上げた顔はとくに痛みを感じていなさそうだった。

「驚かせちゃったわね、最近齡のせいかなーんにもないところでボクを安心させようとしているのか、それともいつもこんな調子なのか、ご婦人はいさっきの派手な転倒が嘘みたいのに、朗らかに笑っている。」

とりあえず大事にはならなかったようで、ボクは小さく息をつく。

彼女には悪いが、心臓にはもつと悪かったのだ。

放られた彼女の買い物かごからは、特売していた玉ねぎがごろごろ

と転がっていて、通行人が迷惑そうに避けていく。

「傷んでないといいんですけど。店に事情を説明して、商品、交換してもらいます?」

玉ねぎやらじゃがいもやらを拾い集めながら、なんとか立ち上がった彼女に声をかける。

店側に責任がない場合って、交換してもらえるのかな、なんてことを考えながら拾っていたものだから、いざかごを渡そうと向き直ったところで彼女が深々と頭を下げ出したのには、ちよつと面喰ってしまった。

そして、今に至るというわけだ。

「本当に、助かったわあ」

「や、そんな大層なこと、してないですし」

ご婦人が頭を下げるたびに、登頂部分に濃く出た白髪がちらちらと目に残り、なんだか申し訳ない気がしてしまう。老人を助けるなんて当たり前のことですから、なんてまさか言うわけにはいかない。

「それより、商品、このままでいいですか?見た目は一応、大丈夫そうですけど、長期の保存ってなると、傷んでると困りますよね」とにかく彼女のお辞儀の連発をやめてほしくて話題を変える。

特売の玉ねぎに、袋入りのじゃがいも、土着きのにんじん。今日の献立はカレーだろうか、なんて、いらない詮索をしてしまう。ケイちゃんとのプチ同棲も今日が初日だし、ボクもカレー作ろうかな。無難だし。

「いいえ、大丈夫。自分の責任で転んだんだもの。店側にこれ以上迷惑かけちゃ悪いわ」

柔らかな口調だけど、妙にきっぱりと言い切る彼女からは、さっきの大げさなまでのお辞儀も相まって、責任感の強いケイちゃんを連想させた。

そこまで連想が働くと、彼女にケイちゃんを重ねて見えてきてしまつて、余計なおせっかいを焼きたくなつてきてしまった。

「このかご、重いですよ。カート、持つて来ますね」

「いいえ、いいの。もうレジに行くところだし」

「この店まで、車が自転車で来ました？」

「いいえ、天気良かったから、歩きで」

「じゃあ、運びます。その、途中まで」

さすがにここまで行くとやりすぎなのはわかっていたけど、つい言ってしまった。

ご婦人も驚いたようで、言葉に詰まっている。この世代ではまず使わない表現で言えば、「ひいている」というところだろうか。

そりゃそうだろう。たった今会ったばかりの見知らぬ小娘から、家まで着いてきますなんて言われれば、当然そんな反応になる。

でも、なんとなく、放っておけなかったのだ。

彼女が持つカバンから、照明を受けた飾り紐が滑らかな光沢を放つ。深海を思わせる、深い青だった。

まだボクがケイちゃんときょうだいだった頃から、深い青はケイちゃんを思わせる色だった。昔、そう思うに至った思い出があるのだ。

だから、というにはあまりにも強引かもしれないけど、ボクはこのご婦人を放っておくのに、すごく気が引けてしまったのだ。

「困ったわ」

彼女が力なくため息をついたことで思考は途切れ、自分の発言が、

やっぱり物騒なこのご時世にはとんでもなく非常識なことを思い出し、あわてて取り消そうとするのを遮るタイミングで、彼女がまた口を開く。

「いいお茶菓子がないのよ」

「え？」

「こんなことなら、あのときやっぱりあの人に食べさせちゃうんじゃないかったわ。あの人がいたら、あればあっただけ食べちゃうんだから。普段私が買っておくのは、そうよ、こんなときのためなのに」話しに着いて行けないボクの前で彼女は一人大きく頷き、ようやくボクの方を向く。

「ちょっと付き合ってもらってもいいかしら。このスーパーの隣にね、おいしいお菓子屋さんがあるのよ」

「はあ」

「あなたにお礼がしたいの。ぜひ、家に寄って行ってちょうだい。そこのお菓子を馳走させてほしいの」

自分で言っておきながら、本当に家まで着いて行くことになる流れに驚いた。ボクは野菜を拾い集めて渡したただけだ。わざわざお菓子を買ってもらうほどのことはしていない。

でも、ここで招待を断るのはボクの申し出と矛盾するような気がして、とりあえず着いて行くことにした。ああ、なんかややこしい。

「本当に、親切に、どうもねえ」

家に案内してもらう道中も、彼女は言葉を少しずつ変えながらも、お礼を言い続けていた。

「いえ、本当に、大したことじゃないですし」

ボクのこのセリフも、いったい何度目になるんだろう。最近の老人というのは、みんなこんなに義理堅いんだろうか。普段大学生くらいとしか接しないから、よくわからない。

ふいに、お礼の言葉が途切れ、沈黙が降りる。いよいよお礼の言い回しも尽きたのだろうか。

老人とも共有出来そうな話題を探しているうちに、さっきとはニュアンスの違う言葉をかけられた。

「そういえば、まだお名前を聞いていなかったわ。教えてくださいませんか？」

「あ、ボク、見原忍って言います」

一人称は、間違えたわけではない。普段は仲の良い人たち以外には「私」という一人称をちゃんと使っている。

まあいいか、と思ったのだ。こっちに來てからはまだケイちゃんとか話していないから、「ボク」という一人称しか使っていない。いちいち使い分けるのも面倒な気がしたのだ。それに、変に思われようと、もう会うこともないだろうし。

そんな軽い気持ちで使っただけに、ご婦人が立ち止まってボクを食い入るようにつめてきたのには驚いた。まるで幽霊でも見たかのように、驚きのあまりに顔が青ざめている。転んだときは平気だったのに、そんなに驚くようなことだろうか。

「すみません、やっぱり女なのに自分のこと『ボク』って言うの、変ですよ」

あわてて弁解するボクを見る彼女の眼は驚きで見開かれてはいるものの、嫌悪の色がないことに気付いた。

「あら、ごめんなさいね。こんなに過剰に反応しちゃって。失礼よね。本当に、ごめんなさい」

この調子だと、今度はごめんなさい合戦になりそうだと身構えたものの、ご婦人から出てきた言葉は予想していないものだった。

「孫娘もね、自分のことボクって言うてたのよ」

少し震えた声だった。ほんの少しの懐かしさと、とてつもない悲しみが染み出た、切ない声だった。

「お孫さんと、最近は何やっていないんですか」

「もう会えないの」

彼女の中が空洞みたいに感じた、さっきの軽さを思い出した。それだけ、声はうつろに響いた。

「とても遠いところに、行ってしまったのよ」

どこからかパトカーのサイレンが聞こえてくる。

「いやあね。この辺も最近、物騒なのよ」

スーパーで会ったさっきまでのように、彼女はまたのんびりとした口調に戻る。

「忍さんが『ボク』って言うのには、何か理由があるのかしら？」

「えっ」

「ふふ、ちょっとした好奇心。よければ教えてほしいってだけの軽い気持ちだから、嫌だったら言わなくてもいいのよ」

さっき聞いた「孫娘」の存在感がまだ色濃く残っていただけに不意なこととは言えないと身構えたものの、彼女の表情も、すでに柔ら

かいものに戻っていた。

ボクは言葉を選びながら、少しずつ説明していく。

「なんとなく、自分が女の子って感じがしないんです」

昔からそうだった。可愛い服を着て、あの男の子がかっこいいとか好きだとか、そういう女の子たちとボク自身が同じ人種というのが、どうもしっくりこなかったのだ。

わたし、とか、あたし、とか連呼する抵抗は小学生になってもなくならなかった。

父さんが、正確に言えばケイちゃんのお父さんが、「ボク」と使っている響きが一番自分に合っているような気がして、ごく自然に、ボクは「ボク」と言うようになった。

周りがそれを容認してくれたわけではない。

ショートカットにしようとか、スカートを決めて穿いていなかろうと、ボクの性別が女子であることに変わりはないからだ。

「べつに、自分が男子だと思ってるわけじゃないんです。女子に生まれたことを恨んでるわけでもないです。ただ、男子と女子に二分されると、すごく窮屈なんです」

そこにボクの居場所がないから、と言えば、ひどく陳腐な気がした。自分は他人とは違う。まるで、そんな身の程知らずなことを言いたいみたいで、すごく恥ずかしい。

なのに、そんな傲慢な言葉が、皮肉なことにボクのジレンマに一番近かった。

自分はいったい、何ものなのか？

この言葉に出会ったのは、そんなジレンマの解消を諦めつつあった、高校時代のことだった。

いかつい顔をした肖像が隣に映り、ボクでない誰かを、あるいは何かを、強く見つめている。教科書の1ページとしては、べつに奇天烈なことでもなんでもなかった。

でも、ボクはその言葉に射抜かれた。大げさな表現ではないつもりだ。

ボクは、これを知りたかったのか。

体中を駆け抜けた「何か」は、ずっと知りたかった「答え」ではなかった。

「問題文」だったのだ。ボクは数年前にようやく、物心ついた頃から常に気配を感じていたものの正体を知ったのだ。

「自分だけの形が、ずっと欲しかったんです。『ボク』って呼び方がそれに当てはまるわけではないんですけど、少なくとも持っているボキヤブラリーの中では一番、窮屈じゃないんです」

言えば言うほど、ボクが持てあましている焦燥から離れていく気がした。

個性豊かって言葉ほど無個性なものはない。痛感した。

人と違う存在になりたいから、ちょっと変わった呼び方で注目されたい、自分を誇示したい。ボクの言葉じゃ、こんなところだろう。じれったいのに、ちゃんとした言葉が出てこない。

「わかってほしいんです。その他大勢じゃない、ボク自身をちゃんと、伝えたい。それだけのことなんです」

ご婦人はボクの言葉に共感出来るところなんて一つもないはずなのに、黙って聞き続けてくれた。

今度は救急車のサイレンが聞こえてくる。さっきのパトカーのサイレンよりも、ずっと近い場所みたいだ。

「この辺、本当に物騒なんですね」

明るい声を出して、さっきのむなしいスピーチを払拭してしまいたかった。

「そうね」

ご婦人は穏やかに答えた。

「でも、いいことだと思わない？」

「物騒なことが、ですか？」

さっきから薄々感じ取っていたけど、このご婦人は、いちいちボクの予想出来ないところに会話を打ち返してくる。

「そうじゃなくて」

ご婦人は楽しそうに笑う。

「こうしてサイレンが鳴るってことは、助けに来てくれる誰かがちやんといるってこと。SOSの声を聞き漏らさずに駆けつけてくれる人がいるってことだもの。大事なことだと思わない？」

改めて彼女の横顔を見てしまった。穏やかではあるけど、何を考えているのか、何を伝えようとしているのか、まるで窺うことが出来ない。

「ちゃんといえるのよね、声を聞き届けてくれる人が」
耳をすませた。

サイレンの音は、いつの間にか消えていた。

「もう一度、鳴りますかね」

「鳴るわ。きつとね」

そしてサイレンは鳴る（後書き）

かつてない長さになってしまいました。ここまで来てくださった方、本当にお疲れ様でした。では、次回も来てくださることを願って、また。

夏休みを前に（前書き）

今回は姉・恵の一人称です。

夏休みを前に

「人間、過去に縛られてしまうことほど悲しいことはないと思わない？」

千佳のやけに力の入った演説を目の前にして、私は無言でアイステイーを口に含む。

「過ぎてしまったことは、もうどうやっても取り消せやしないわ。大事なものはこれからをどう生きていくか。そうよね？」

1対1で向かい合って座っているだけに、この問いかけを投げられたのは私であると判断するのが妥当なんだろうけど、私はやはり何も言わず、口に含んだアイステイーを飲み込む。

「これからとはすなわち夏休み。大学生時代は人生の夏休みとはよく言ったものね。そして、今日、この瞬間からは夏休み中の夏休みということよ！」

日本語としてそれはどうなのかなあと思いつつも、私はやはり黙ってストローでグラスの中身をかき回す。

「さあ、恵。私の言いたいことがわかるかしら！」

「テストは撃沈状態だったけど、今さらどう足掻いたところで無駄だから、きれいさっぱり忘れて夏休みを遊び倒して楽しもう、ってところ、かな」

「・・・ふふ、事実がいつも正解とは限らないわね」

千佳はよくわからないことを言って、ようやく自分のアイスコーヒーを一口飲む。さっきから喋りどおしでまともに飲んでいなかったから、グラスにはまだ並々とコーヒーが残っている。

テスト明けの気晴らしにと千佳に誘われ、大学からちょっと足を延ばしたおしゃれな喫茶店に入った。

普段は大学の学食くらいでしか外食をしない貧乏学生の私にとっては慣れない贅沢でちょっと場違いのような気すらしていたけど、目の前に千佳を座らせると途端にそんな高級感も失せた。こういうの

をムードメーカーというのだろうか。どちらかといえばムードブレーカーの方がしっくりくる。

「で、恵は夏休み、いつ遊べる？」

「んー。8月中はほとんどバイト入れちゃったからなあ」

「ちょっと、大学生は遊んでこそナンボでしょうが。その時間を売り飛ばすだなんて、あんまり感心しないわね」

「逆。時間をお金に替えられるのなんて今のうちだけだから、今やらなくちゃ」

「マジメっていうのも、ここまで来るとなんか不憫だね・・・」

千佳はようやく少しテンションを下げてアイスコーヒーをすすります。

「恵」

「ん？」

千佳の声の調子が変わったのにつられてアイスティーから顔を上げる。やけに真剣な表情と視線がぶつかる。

「今年はさ、もっと楽しもうよ。いろいろと」

「いろいろって・・・」

「海行ったりさ、バーベキューしたりさ、今日みたいにお茶したりだよ。去年、恵ちつともそういうのに乗ってこなかったじゃん。もったいないし、第一さびしいよ、私」

いつものように変に高いテンションじゃないだけに、千佳が本心から言ってくれているのが伝わって来て、私は言葉に詰まってしまふ。千佳と知り合ったのは大学に入ってからすぐで、それ以来今もこうしてテスト明けの気晴らしに誘ってくれる仲のままで。

大学に入るといろんな人と出会う。授業、バイト、サークル。同期もいるし先輩もいるし、2年生になってからは後輩という出会いも増えた。

携帯のメモリーにどんどんデータが書きこまれていって、いつでも連絡の取れる相手はこの1、2年でぐんと増えた。

でも、連絡を取りたいと思える相手は、人見知りの私には少ない。

アドレスを交換したきり一度もメールをしたことのない相手が大半なのだ。数少ない例外が、千佳なのだ。

「ありがとう。また千佳の都合のいいときに誘ってよ」

「私の都合のいいときにつて・・・」

「千佳、サークルで今年から面倒な役員になったんでしょ？テスト前だつていうのに、忙しそうだったもんね。それに、私と違って千佳は友だちも多いし、いろいろ予定もあるんでしょ？千佳の空いてる時間から計画練った方が効率的だよ、うん」

私の言葉に、千佳は「やれやれ」といったげに大きくため息をつく。

「あのね、恵。あんたから私を誘う義務があるの、忘れてるでしょ」

「義務？」

「そう、義務。暇だなあとか誰かに会いたいなあとかそういうとき、恵は私を頼る義務があります」

口の形は笑っているけど、千佳の目は真剣なままだ。

「私さ、恵のこと、けっこう大事に思ってるつもりなの。私にとつて自分のこと何番手だと思ってるのか知らないけどさ、振りまわすくらいの気持ちでいてもらわなきゃ、かえってやだと思うくらいの場所にいるわけ。わかる？」

何も言えなかった。普段のおちやらけた千佳がそんなことを言うから？

違う。

私は今まで、こんなことを言われたことはなかったから。

「恵つていつも自分のこと、過小評価つていうの？低く見すぎ。優先順位とか、そういう配慮はうざい。私はあんたと遊びたいし、一緒にいていろんな思い出つくりたいって思ってるの。あんたは私の友だちでしょ？私のこの気持ちを尊重する義務がある。そうでしょ？」

「・・・横暴じゃない？」

「今さら気付いたの？私は横暴でわがままなのよ。あきらめなさい」

私はアイステイーを飲むために装って、千佳から目を逸らす。

このまま千佳を見つめていたら、誤解してしまいそうだ。

千佳はべつに私とじゃなくてもいいはずだ。

千佳にはたくさん友だちがいるし、今たまたま千佳の前にいるのが私だったからこう言ってくれているけど、本当は私の代わりなんていくらでもいる。

私にとって千佳が数少ない例外だったとしても、千佳にとってはそうじゃない。たくさんいるなかの、一人でしかない。それを忘れちゃダメだ。

私は、つまらない人間だから。

10年前のあの日から住み着いたこの劣等感は、消えない。

だから、私は千佳に頷いてみせたものの、自分から連絡を取ることはないだろうなと思った。

千佳は過去に縛られてしまうことほど悲しいことはないと言った。

それなら、私は千佳の言う、悲しい人間だ。

人生の夏休み。

私は、これを楽しむ権利なんて、あの日から持っていやしないのだから。

夏休みを前に（後書き）

お疲れさまでした。ありがとうございました。

絵の具とケーキと百日草（前書き）

今回は妹・忍の一人称です。

絵の具とケーキと百日草

五感のなかで一番記憶に残りやすいのは、「嗅覚」だそうだ。

顔の一番高いところにある鼻は、もともと状況に応じた匂いをかぎ分けて記憶し、危機回避することに意義がある。腐ったものを食べて食中毒で死んでしまう、なんて悲しい絶滅を人類が辿らなかったゆえんも、嗅覚がちゃんと働いてくれているおかげなのだ。

だからといってこんなことを言われたら、誰だって驚いてしまうんじゃないだろうか。

「君からは、なんだか懐かしい匂いがするよ」

成り行きで家まで着いてきてしまった先で最初に言われた言葉がこれだった。しかも、相手は初対面のおじいさんである。

「あなた、そんなこと急に言われたら忍さんが困ってしまうわ」

ボクの足元にスリッパを並べながらご婦人が助け舟を出してくれる。事実、ボクはけっこう困っていた。勢いで着いてきてしまったうえに招き入れられてしまったのでは、いたたまれなさすぎる。

「あの、荷物も運び終わりましたし、帰ります」

玄關口で回れ右しようとするボクを、老夫婦はやんわりと引き戻す。

「あら、忍さんが帰ってしまったら、はりきってたくさん買ってしまったこのお茶菓子はどうなってしまうのかしら」

「ほう、忍さんというのか。なに、心配はいらないさ。荷物をわざわざここまで運んでくださるような親切な方が、まさかこんなにくさんのお茶菓子を腐らせるようなむごいことを、老人2人にさせるわけじゃないじゃないか」

「ホント、そのとおりねえ」

いたたまれなくなつてまた振り返ってみると、にこにこ笑う老夫婦と目が合う。

「・・・お忙しいところをお邪魔するわけにはいきませんので」

最後の抵抗とばかりに小声で言ってみるものの、ご婦はばつさりと

切って捨てる。

「昼間から、このとおり夫がこのこ出てくるような家よ？忙しいなんて言葉、とくに使わなくなってしまったわ」

ボクは観念してスリッパを借りた。

通された部屋は老夫婦の二人暮らしにふさわしい、どこか温かみのあるものだった。

老人というとなぜか畳とちゃぶ台を連想してしまうけど、床はフロアリングだし机はどっしりとかまえた大きなものだった。

「かわいいですね、この花」

テーブルの中央で花瓶に生けられたカラフルな花について魅入ってしまった。

丸みのある花びらが何枚も折り重なって、まさに「てんこもり」という感じだ。赤や黄色、紫、いろんな色がある。

「あら、忍さんは花が好きなの？」

「あ、はい。好きというか」

この花はどこかで見た覚えがある。そんな気がして気になってしまった。

いや、花だったらどこで見かけても全然、不思議じゃないんだけど。自分のなかで「これはけっこう、大事なことなんじゃないの？」とせつつかれているみたいで、思い出せないことがちよつともどかしい。

「これは百日草と言ってね。夏の花で、うちの庭で咲いたものなんだ」

ボクの向かい側に座ったご老人が花の位置をちよいちよいと指で直しながら教えてくれる。その仕草がなんだかわいらしい。白髪一色の外見に反して、ずいぶん若々しい・・・というより年頃の乙女のような可憐さを感じさせた。

そんなことを考えていただけに、急に正面から見つめられて頭を下

げられたときは驚いた。

「忍さんといったね？妻の悦子を助けてくれて、本当にありがとう」
「いや、ですから、本当に大したことはしてないんで」

「あら、ずいぶん大したことよ？」

悦子さんというらしいご婦人は和風のお盆に華奢な洋風のティーセットに乗せた、なんともミスマツチな組み合わせを持って台所から出てきて言う。

「スーパーにはけっこう人がいたのに、材料を拾い上げてくれたのも私を助け起こしてくれたのも、忍さん一人だけだったもの」

「うん、やっぱりそれは大したことだね」

悦子さんも旦那さんもうんうんと頷き、ボクを見てにこっと笑う。

ボクは苦笑いをして目を逸らす。

この老夫婦二人は、人が良すぎる。

普通、たかが助け起こしてもらっただけで見ず知らずの小娘を家に上げるだろうか？いや、まあボク自身が着いて行くとはいいたのがそもそも間違いだったんだろうけど、それでもこうしてお茶やお菓子をふるまってくれるのはやりすぎだと思う。老人って、みんなこんなに人がいいんだろうか？だから呆気なく降りこめ詐欺に騙されてしまうんだろうか？

「忍さん？」

悦子さんの言葉で我に帰る。

「どうしたの？ずいぶん思い悩んだ顔をしていたけど」

思わず頬に手をやる。急いで口角を上げて笑顔を作る。さっきまでと同じ、ひきつったものになってしまっただろうけど。

「すみません、えーと、その、こんなにおいしそうなお菓子を食べることって滅多にないので、緊張しちゃって」

今しがた悦子さんに出してもらった、きれいな色どりのケーキを指す。

「学生だと、なかなか自炊に精一杯でこんなにおいしそうなお菓子を買う余裕がないというか」

「あら、忍さん、大学生くらいだとは思ってたけど、一人暮らしだったのね。この辺の大学？」

「いえ、今は夏休みなので遊びに来ているだけなんです」

「専攻は何？あつ、待って。当ててみるから」

楽しそうな悦子さんの隣で、旦那さんはお茶を一口すすった後に断言する。

「忍さんは、美大生だね？」

「えっ」

「あら、当たり前なの？ダメじゃないあなた。私、まだ考えているところだったのに」

「こういうのは早い者勝ちなんだよ」

「大人げないこと言うのね。まるで子どもだわ」

「君と同じ年だよ。嬉しいことにね」

「あの、どうしてわかったんですか？」

盛り上がっている二人に水を差すのは気が引けたけど、これはどうしても聞いておきたかった。

美大生というのは、それとないオーラを放っていると聞いたことがある。同じ大学に通う先輩が偉そうに言っていた言葉だ。

ボクにもそういう貫禄が備わって来たということなんだろうか？

しかし、旦那さんの言葉はボクの期待とはまったく違うものだった。

「匂いだよ。絵の具の匂いがするんだ、忍さんから」

匂い。自分の匂いを嗅ごうとして、さすがに躊躇われる。人前なのだ、一応。

「ひょっとしてさっき言っていた懐かしい匂いというのは・・・」

「うん、それでも僕は昔教師をやっていたね。いつもいた教室の隣が美術室だったから、絵の具の匂いというのは僕の教師時代のシンボルでもあるんだ。形がないからシンボルっていうのもおかしいのかもしれないけど」

昔のことを思い出したのか、楽しそうに笑う旦那さんを前に、思っていたより自分が落ち込んでいることに気がつく。

「あらあら忍さん、匂いつていつても、私だつて言われて今気付いたくらいだから、べつにそんなに強く匂っているわけじゃないのよ」悦子さんはおろおろとフォローを入れてくれる。おかた、ボクが絵の具臭いと言われて落ち込んでいると思つたのだらう。あいにく、ボクにそんな女の子らしい憂いは湧いてこなかったのだけど。

「違うんです。そういうことじゃなくて」
笑つて弁解しようとする。

ホントに人がいいな、この二人は。

なんでそんなに心配そうな顔をしているんだらう。ボクはべつに、気にしてなんかいないのに。

「たしかに美大生なんですけど、最近ちょっとスランプっていうか、自信をなくしちゃつて」

絵を描くことが好きで、自分にはこの道しかないと思つて進んできたはずなのに、最近頭に浮かぶのはこの言葉ばかりだ。

どうして美大生になつてなつちやつたんだらう？

美大には絵のうまい人なんていくらでもいて、入学早々にボクのさやかな自尊心はあつさり、あまりにも呆気なく砕かれてしまった。それでも好きだからこそ続けてきたんだという根本的な気持ちだけは捨てていないつもりだった。

「自分が、わからなくなつちやつたんです。個性が何よりも大事な世界なのに、誰かの真似をしているような気がしてしまうんです。そうなるともう、何を描いたらいいのか、描きたいと思つてきたのはどうしてだったのかすら、わからなくなつてしまつて」

言いながらどんどん惨めになつてきて、笑つて誤魔化す。
そういうところがダメなんだろうなあと思ひながらも、ボクは結局笑つて問題から目を逸らさないともつとダメになつてしまふ、どうしようもない人間なんだらう。

「最近絵の具なんて絞り出してないから、当てられたのはすごいと思います。やっぱり、けっこう強く染みついちゃうんですね、絵の具って」

悦子さんは悲しそうに目を伏せたけど、旦那さんは変わらず、穏やかな表情のまま、予想していなかったことを言いだした。

「それなら、僕に絵を教えてくれないかい？定年になったら絵画にチャレンジしてみたいと思っていたんだよ」

思わずまじまじと旦那さんののんびりした顔を見つめてしまう。

この人、人の話を聞いていたんだろうか？ボク、今、自信をなくしたって言ったよね？なのに、なんで先生のまねごとみたいなことを提案してくるんだ？

「あの、そういうことはこんな学生のひよっこではなく、地域の交流会や通販カタログなんかを利用した方がずっと実になると思いますけど」

「あなた、忍さんは忙しいのよ。大学生なんて、夏休みはそれこそいろいろやることがあるんでしょう？課題とか研究とか、忙しいんじゃない？」

「いえ、課題とかはあまりなくて・・・遊びに来たものの、今後の予定とかはまったく考えてなくて」

正直に話した途端、悦子さんの目がきらりと光ったような気がした。何か言う前に悦子さんの手が返る。

「あら、そういうことならまたうちに来てもらいましょうよ。お礼としてまたおいしいケーキをご馳走できるわ。あなた、画材くらいは持ってるんでしょ？」

「うん。これから買いに行こうと思うんだ。先生が決まったとなると、急に現実味が出てきたよ。楽しみだなあ」

「そうよ、忍さんは先生なのよ。ちゃんと先生って呼んでね」

「いいね、先生か。なんだか定年前に戻った気がするよ。まあ、今度は僕が生徒なんだけど。先生と呼ぶのなんて半世紀ぶりかな？すごく若返った気がする」

「それはいいことね。あなた、最近やることもなくてずいぶん元気をなくしていたものねえ」

「うん、いい生きがいができたよ」

ボクを差し置いてどんどん進んでいく話に、もはや口を出すことは出来なくなってしまった。だって、今断ったら旦那さんを早死にさせたいみたいじゃないか。

「でも、忍さんの意志が一番大事よね。ごめんなさいね、二人で浮かれてしまつて」

悦子さんがようやくボクに発言権をくれる。

助かったとばかりに断ろうとするボクに、悦子さんはにっこり笑つて言う。

「お礼のケーキ、何がいいかしら？チーズケーキでもミルフィーユでも、なんでも好きなものを言つてね」

「え？」

「そうだね、うん。先生の意志をちゃんと聞いておかないとね」顔を見合わせてまたもやにっこりと笑う老夫婦に、ボクの答えは一つしか用意されていないことをようやく悟る。

「それじゃ・・・一番安いやつ、お願いします」

百戦錬磨の老人に、ひよつこの小娘が敵うわけないのだ、最初から。

絵の具とケーキと百日草（後書き）

お疲れ様でした。ありがとうございました。ちなみに、百日草の花言葉は今後使うキーワードなので、「この話、ぐだぐだだけど、ちゃんとプロットは出来てるのか？」と思われた方は見てみてください。この話の筋は、その花言葉に準じるものにしていこうと思っています。

BGMは穩やかに（前書き）

今回は姉・恵の一人称です。

BGMは穏やかに

労働は人間の責務だという。

だから、というわけではないけれど、私がアルバイトをしていることもそんなに不自然なことではないと思う。

「お疲れ様です」

物置を兼ねた狭っ苦しい更衣室から出た私は調理人の人たちにいつものように挨拶をする。

今日は大して予約が入っていないのか、調理人の人たちの下ごしらえの様子もどこかのんびりとしている。でも私の挨拶の返事が返ってくるわけではない。いつものことだから特にきにしたりはせず、私は自分の仕事を始めるために厨房を出て店内へと向かう。

私がバイトをしている店は夕方からだいたい日付が変わるまで開いている小さな居酒屋で、平日は基本的に閑古鳥が始終鳴いている。個人営業のお店だからチェーン店のように正社員がバイトを引っ張っていくという力関係もなく、驚いたことにホール、つまり注文を取ったり料理を運んだりするといった、直接お客さんと関わる仕事はすべて私たち学生のアルバイトで構成されている。これには初めのうちはとても驚いた。

「おはよう、ケイちゃん。今日も早いね」

「おはようございます、リンダさん」

夕方であっても、この店では最初の挨拶は必ず「おはよう」ということになっている。これにも驚いたけど、そもそも夕方からしか開かないお店だから、ある意味自然な習慣なのかもしれない。夕方に使う挨拶というのは日本語にはないし、「こんにちは」というのは親しい間柄ではほとんど使われない。

リンダさんは腰のあたりをトントンと叩いてから「今日も絶対、暇だよ」と呟き、台を拭くための雑巾を取りに行く。

私は苦笑いをしてその後ろ姿をほんの少しだけ見送る。

リンダさん、というのは私の4つ上の女の先輩で、今は大学院生だ。本名は林田さんという立派な和名があるのに、昔そんな歌手がいたという理由であっさり音読みされた名字で定着してしまったらしい。「まあ、いいんじゃない」とどうでもよさそうに受け入れてしまうリンダさんの昔が目には浮かぶ。リンダさんは、良く言えばクールで、正直に言えはいるんなことに無頓着だ。

シフトの都合上、私は大抵リンダさんと一緒に働いている。小さい店だし、第一暇なので二人しかホールがいなくても店は回る。

本日のおすすめが書かれた黒板の日付を書き換えたり、テーブルを拭いたり、たとえお客さんがほとんど来ないことがわかっていてもホールの仕事はそれなりにある。

各テーブルの端の方に置かれた調味料や割り箸なんかの補充をやっているうちに、開店してから1時間はすぐに経ってしまう。それでも依然としてお客さんは一人も来ない。いつも通りのこととはいえ、いや、いつも通りのことだからこそ、この店は本当に大丈夫なのかと毎回不安になってしまう。

「やっぱり、今日も暇だねえ」

私の隣に来て、玄関からいつお客さんが来てもいいようにと見張りつつ、リンダさんはのんびりと言う。

「まだわかりませんよ。これからドカッとお客さんが来るかも」

自分でも信じていたわけではないけど、安易に同調するのも後ろめたくて、とりあえず口では店が決して流行っていないことは認めずにおく。

「んー、そりゃ絶対来ないってことはないけどさあ。なにせ、冴えない店だからね」

「冴えない、ですか」

私は照明が抑えてある、見ようによつてはちよつと薄暗い店内を見渡して考える。

BGMは物静かなクラシックで、「静かに穏やかにお酒を飲める店なんですよ」とアピールしているようにもとれる。実際、静かで穏

やかにお酒を飲めるのは確かだ。ガラガラだから。

「やっぱりこう、もうちょっと賑やかな音楽とかにした方が、居酒屋って感じがするから、ですか？」

「うーん、まあそれはそうなんだけど。もっと大きな理由としてさ、この店、値段が高いじゃない」

ああ、と、今度はすんなり頷けた。

貧乏学生の私だけがそう思っていたんだろうかと今まで言葉にして認めたことはなかったけど、やっぱり普通感覚として「お高い」んだ。

「高いわりには、特に他の店にはないような変わった料理を出すわけでもないし。ちよつと背伸びしてるくせにホールは全員学生のバイトだし。中途半端っていうか、背伸びしすぎなんだよ」

リンダさんは飄々とそんなことを言つてのけるけど、私は店長に聞かれていやしないかとかかなりヒヤヒヤした。一応、私たちは雇われの身なのだ。

私の狼狽ぶりを見たリンダさんはおかしそくに笑う。

「ケイちゃんってば、ホントにマジメだね。いいじゃん、私たちどうせしがないバイトなんだから。クビになったからって生活に困るわけじゃないんだからさ、そんなにおどおどしないでよ」

「いや、クビになったら困りますよ、やっぱり」

「もっと条件いいところに雇ってもらうのもアリだと思うよ。私はもう院生だけど、ケイちゃんはまだ2年生でしょ？20歳なんて、若いなあ」

「まだ19歳です」

年齢を若い方に訂正するなんて、我ながらおばさんくさいなあと思しながらも言わずにはいられなかった。私はもう若くないのかも知れない。

「へえ。まだ未成年かあ。誕生日、いつ？」

「8月31日です」

「あ、じゃあ今月末なんだ。なんか、夏休み最終日が誕生日って複

雑じゃない？大学は9月も休みだけど、今までは8月で休みも終わりだったんでしょ？」

「それ、よく言われます」

夏休み最終日に私は一つ年をとる。

クリスマスに誕生日だという子が小学生のときのクラスメイトにいて、プレゼントが合併されて嫌だとかそんな話をしていたから、私の場合はそんなに嘆くような日付ではないと自覚しているつもりだけど、やっぱりちょっと損をしているような気は今でもしている。

「明日から学校かあ」とため息をつきながらも、やっぱり自分の誕生日は特別な日のような気がして、そわそわしてしまう。毎年のことだ。

私にとっては夏休みの終わりであり、一つ年をとった自分の始まりでもあるのだ。

「いいよねえ、ケイちゃんは。まだまだこれからじゃん？私なんて来年から社会人だよ。夏休みなんてどうせ3日くらいしかとれないだろうし、第一年取ったなあって思っちゃう」

リンダさんはまた腰をとんと叩く。

「腰、痛いんですか」

「んー、特に力仕事してるってわけでもないんだけどねー。やっぱり年だよ、やだなあ」

年だ年だと連呼するリンダさんだけど、私の4つ差だからまだ23くらいのはずだ。腰痛を患うような老人の年では、断じてない。

「何言ってるんですか。リンダさん、まだ全然若いじゃないですか」さつき自分を「おばさんくさい」とか「若くないのかもしれない」なんて評価しておきながら、私は年上のリンダさんを必死にフオローしていた。我ながら調子がいいもんだと呆れてしまう。

「ケイちゃんにはまだわかんないかもしれないけどさ、20になってからが速いんだよ、時間が過ぎていくのが。ホント、驚くくらいに。私だっつてついこの間成人式やったはずなのに、いつの間にか後輩がその立場になってるんだもんなあ」

「私は成人式まだですから、大丈夫ですよ」

私はいったい何に対してのフォロワーなのか自分でもわからなくなりながらも調子を合せて口を動かす。

リンダさんは必死になっている私を見てふっと笑う。

「何か、やっておきたいこととかないの？」

「やっておきたいこと、ですか」

「10代最後の夏なんですよ。ノルマって言うのも変なのかもしれないけど、目標みたいなものはあるの？」

ま、私は特になかったけどー、とリンダさんはおどけてからまた力なく笑う。

「なんか、私にとってはけっこう感慨深かったからさ。10代と20代って、全然違うって。大人になるって感じ？お酒もOK、法律上はもう大人。大学に入るまでは20歳になる頃には何もかも変わると思ってたくらい」

青臭い考えだよねえと笑うリンダさんを、思わずまじまじと見つめてしまった。

腰が痛いリンダさん。バイト先の欠点を平気で言えちゃうリンダさん。青臭いと思うことを後輩の前で暴露してしまえるリンダさん。大人って、なんだろう。

考えたことがなかったわけじゃない。むしろ、幼いときはよく考えてきたテーマだと思う。

でも、改めて疑問に思ってしまうのだ。

成長するって、どういうことなんだろう、と。

「何かやらなくちゃいけないような気は、なんとなく、しているんです」

私はリンダさんがそうしているように、玄関の方を向いて小さな声で話す。

「サークルで思い出作るとか、友だちと何でもないことで盛り上がるとか、花火をするとか、バイトでたくさん稼ぐとか、たぶん、そういうことじゃないんです。自分でも、うまく説明出来ないんです

けど」

BGMがやけに鮮明に聞こえる。そうか、ここは静かな店なんだっけ。静かで穏やかで、冴えないお店。

私にぴったりじゃないか。

バイトに来る前に会った千佳のことを思い出す。

今年のもっと、たくさん遊んで思い出を作ろう。そう言っていたんだっけ。

私はそのとき、何を思った？

千佳に自分から連絡することはないだろうなと思った。

どうして？それは、私と千佳はつりあわないと思ったからだ。いつも感じている。気付かないフリをしているだけで。

自問自答の不毛さに、呆れた。それでも思考は止まらない。

千佳がバイトを始めるなら、きっとBGMが賑やかな店にするだろう。

値段が高いくだけで何の特徴もなく、変に背伸びをした中途半端なこんな店ではなく、もっとお客さんがたくさん来る、おしゃれで繁盛している店にするだろう。千佳には、それが似合っている。

あまりにも混みすぎててんてこ舞いで、「もっと空いていたらなあ」と繁盛ぶりを恨むだろう。暇だと連呼するしかない店があることを想像することすらないだろう。

「20歳になっても、結局私自身、大して大人になれるような気がしないからかもしれません」

今度は私が笑ってみせた。リンダさんのように飄々と欠点を言えちやうような思い切りの良さを、それで少しでも真似た気分になりたかった。

「大人になったら、もう少し自分を好きになれるんですかね」

「ケイちゃんはそのこと、嫌いなのか？」

「好きではないです」

「どうして？」

「いいところがないからです」

卑屈になっっているつもりはなかった。事実をちゃんと冷静に捉えている自信はあった。

私は、つまらない人間だ。それを笑って誤魔化せたつもりになってしまえるほどに。

リンダさんは前を向いたままだった。お客さんが来る気配は今もない。

「よし、じゃ、こうしよう」

ずいぶん長い沈黙のあと、リンダさんは急に言った。

「ケイちゃんの、20代になるまでの目標。自分に自信を持てるようになること」

「目標、ですか」

「うん。ないよりはあった方がいいでしょ。夏休みは、まだ始まったばかりだからさ、いろんな経験しなよ。それで、私は大人だって断言出来るようになったじゃないな」

「先輩、それ、すごく他人事みたいに聞こえるんですけど」

「そりゃそうだよ。自分のことではないし。うん、他人事。でも、出来るといいね」

歯切れよく、楽しそうに言うリンダさんの横顔をちらつと見てから、また正面に視線を戻す。

「大人になるほどの経験って、いったいどんなもんなんですか」

「それは、まあいろいろだよ」

「私、8月はほとんどバイト入れちゃいましたよ」

「バイトを言い訳にしない。社会勉強だと思って、しっかり働きましょう」

ケイちゃんはいつも頑張ってるけど、と付け加えるリンダさんの横顔は若々しいものだった。腰が痛いと言っている人、年寄り臭いことを言っている人のそれではなかった。

人を褒められる人は、自分に自信のある人だと思う。

自分にちゃんと誇れる部分があるから、他人を見ても揺るがないでいられるのだと、リンダさんを見るとそう思わずにはいられない。

「やっぱり、リンダさんは若いですよ」

「どうしたの、改まって。何も出ないよー」

「若いですけど、でも私よりずっと大人ですね」

リンダさんには、やっぱりこの店はふさわしくないですよ。そう思ったけど、言わないでおいた。

お客さんは、やっぱり来ない。

BGMは穏やかに（後書き）

おつかれさまでした。ありがとうございました。

ほんまだよ（前書き）

今回は妹・忍の一人称です。

ほんまだよ

時間というのは一人ぼっちの人間の傍に長くいたがるものなのかもしれない。

同情のつもりなのか知らないけど、はつきり言えばそれはいい迷惑だ。

一人の時間を長く過ごさなくちゃならないのは、やっぱり良い気はしない。

「おかえりケイちゃん。遅かったね」

呼び鈴を鳴らさず、自分で鍵を回して家に入って来たケイちゃんを、ボクは笑顔で出迎える。

「カレー作っただけど、食べる？」

ケイちゃんはようやく自分の家に居候が来ていたことを思い出したようで、少し間を置いてから「ああ」と息を漏らす。

「バイトでは賄いが出るの。言ってなかったっけ」

「えっ、じゃあ、もう食べてきちゃったんだ」

「うん。っていうか、さすがにこんな時間には食べないよ」

本棚の上に置かれたアナログ時計を見る。もう日付を回っていた。

「バイトって、こんなに遅くなるんだね・・・」

「まあ、居酒屋だしね。そのぶん時給はいいから、文句は言えない」
ケイちゃんは面倒くさそうにそう言っただけで肩から鞆を下ろし、自分も座り込む。

狭い部屋だから、一人増えただけでお互いの存在感がすごく大きく感じられる。そのぶん、なんだか沈黙が痛い。

「居酒屋でバイトしてるんだね。なんていうお店なの？ボク、今度行ってみようかな」

「高い店だから、学生には向かないよ」

「へえ、高級なお店なんだ。やっぱりその辺のお店じゃ食べられないようなすごいものを出してるんでしょ？そんなすごいところで働

いてるなんて、ケイちゃんはすごいね」

やたらと「すごい」を連発して褒めたつもりだったのに、ケイちゃんは照れた様子もなく、不機嫌に黙り込む。何か気に障るようなことを言っただろうか？

ひよっとしたら、バイト先で何か失敗をしまして、今はバイト関連は禁句なのかもしれない。だからボクは急いで話題を変える。

「あ、明日はバイト、ないよね？ボクが料理作るから、何でも好きなものリクエストしてよ」

「明日もバイトあるの。っていうか、8月はほとんどの日数をバイトに割いてるから」

素っ気なく言ってからケイちゃんは机に置いてあったリモコンを手に取り、テレビを点ける。

画面に大寫しになった芸人のバカ笑いが映る。

あつはつはという笑い声が、場違いにこの部屋に生まれる。

なんでそんなにバカみたいに笑ってるんだよ、と我ながら理不尽だと知っていつつも責めたくなくなってしまふ。

ボクたちは会話すら続かないんだぞ、なんとかしろよ、と。

「忍は今日、日中は何して過ごしてたの」

ケイちゃんはテレビから目を離さずに口を開く。

べつに熱心に魅入っている様子もなかったから、ボクと同じで目のやり場に困った結果なのかもしれない。

「ああ、なんか、スーパーでおばあさんを助けたというか、手伝ったら、成り行きで家に着いて行くことになっちゃって、その人の家でお茶とケーキをご馳走になったんだ」

ケイちゃんは驚いたようにボクの方をぱっと見たけど、目が合うとすぐに気まずそうにまたテレビの方へと視線を戻す。

「それは、また」ケイちゃんは何と言っているのかわからないとも言いたげに、たどたどしく唇を音もなく動かしてから「すごいわね」とだけ言った。

「うん。知らない人だったのに、なんかいつの間にかまた家に行く

約束までしちゃったんだ」

「仲良くなっただってこと？」

「うーん、それもあるんだろうけど、そのおばあさんの旦那さんに絵を教えることになったんだ」

自分で言ううちに、なんでそんなことになっちゃったんだろう、とあらためて首を捻りたい気持ちになった。

老人を助けました。家まで着いて行きました。絵を教えるためにまた伺うことになりました。どれも本当のことなのに、結果だけ見ると嘘くさいというか、すごく現実味がない。

「あんた、昔から絵、うまかったもんね。まだ続けてたんだ」

「続けてるといっつか・・・ボク、一応今、美大生なんだよ」

ケイちゃんは、今度は驚いてボクの方を見ることはなかった。見知らぬおばあさんの家にのこのこ着いて行ってお茶をご馳走になることの方がずっと驚くべきことだとも言いたげに。

「それは知らなかった」

なんでやねん！とテレビからツッコミが入る。まるでこっち側のタイミングに合わせたような見事なタイミングだったけど、やっぱり場違い。余計なお世話というやつだ。

テレビから吐き出される爆笑のエネルギーは、画面のこちら側には欠片も届かない。さっきよりずっと居心地の悪い沈黙だけが鎮座している。

知らなかった、か。たしかに、ケイちゃんに言った覚えはない。言わなければ伝わるはずはない。小学生だって知っている。なのに、ボクは忘れていた。

あらためて、10年間という空白の大きさを思い知らされたような気がした。

ボクがどんな学校にしようと、フリーターだろうと外出好きなニートだろうと、ケイちゃんがそんなことを知るはずもない。いくらボクにとつては当たり前のことであろうと、ケイちゃんにとつてはそうではないのだ。

でも、家族なら当然知っていることを知らないというのは、やっぱり「家族以外、つまり他人」とずばり言われているのと同じことで、それがすごく居心地が悪かった。

日付が変わったあとに同じ部屋でテレビを見ている関係なのに、お互いがどんな職業についているのか知らないボクたちは、いったいどんな関係なんだろう。

家族ではない。友だちでもない。知り合いではある。急な居候をあっさり受け入れてくれる、ただの知り合い。

ボクたちは、お互いのことを何も知らない。その事実だけが、この気まずい沈黙のすべてだった。

先に口を開いたのはケイちゃんだった。

「そっか、美大か。忍には合ってると思うよ。絵、うまいし」

「ボク、絵、うまかったっけ」

形だけであつても、褒め言葉がケイちゃんから出てきたことに驚いて、少し声が裏返ってしまう。

「なにそれ。絵がうまいから美大にいるんでしょう」

決してそういうわけでもないけど、それを言っても始まらないだろうから、ボクは曖昧に笑った。

「昔、描いてたじゃない。空の絵」

また沈黙が降ってくるのかと思っただけに、ケイちゃんがこう言いだしたときは、いったい何のことだろうと戸惑った。

当のケイちゃんも自分の言葉に着いて行けていなかったようで、「なんで私はこんなことを言いだしたんだろう」と横顔が語っている。でも、ちゃんと続きの言葉は出てきた。

「小学生のときだったと思うけど、たしか宿題で空の絵を描かされたじゃない。私は正直絵なんてあんまり好きじゃなかったし、ちょうど絵の具セットに入ってた『そらいろ』っていうので塗りつぶしちゃおう、とか思ってたの」

残念ながら、ボクにはそんな思い出はなかった。絵を宿題にされたことはあったかもしれないけど、それが空の絵だったかどうかまで

は、記憶に残っていない。

「そのとき、あんたは言ったのよ。そらいろ絵の具は、空の色をしていないって。で、あんたの絵を覗き込んでみたら、すごくきれいな空の絵が出来あがってた」

そこでケイちゃんは言葉を切ってしまう。またテレビのバカ笑いだけがむなしく流れる。

そらいろ絵の具は空の色をしていなくて、でもボクはケイちゃんの言うことをそのまま使うのなら「きれい」に仕上げていて、だからボクは絵がうまい。そういうことなんだろうか。

ありがとうと言うべきなのかな、一応、褒められたみたいだし、と言葉を選んでいるところで、ケイちゃんはさつきよりずっと小さい声で急に続きを言った。

「だから、あんたは人と違う見え方が出来るんだなって思って、それがけつこう羨ましくて、私とは違う人間なんだなと思った」

これほど言葉に困ったことは今までなかったと思う。それくらい、ボクは何を言っているのかわからずにいた。

人と違う見え方？空の色？羨ましい？違う人間？

いったい、何のことなんだ。ケイちゃんはボクのことをいっただんな目で見ていたんだ？

「美大生は、充分、普通の人間だと思うけど」

ボクは混乱した頭で、とりあえず最初に出てきたセリフをそのまま言った。

「べつに普通じゃないとは言っていない」

ケイちゃんはやけに断定的に言う。

「ただ、私とは違うなと思っただけ」

「ケイちゃんとボクが違うのなんて、当たり前じゃないか」

ボクはやっぱり、ケイちゃんが言いたいことを捉えられないまま、思いついたことをそのまま言う。

「そう。私とあんたは違う。忍はすごいと思うよ」

「ありがとう。でも、それって、ケイちゃんはすごくないってこと

？」

「卑屈に聞こえた？」

「すごく」

「でも事実でしょ」

「ちよつと待つて。ボク、今全然着いて行けてない」

ボクたち、どんな話をしてたんだっけ？すごいだのすくないだの、そんな内容の会話だっけ？

ケイちゃんは、何を言いたい？どうしてボクと目を合わせようとしてない？

「ごめん。今日はちよつと疲れてるみたい。変なこと、言ったかもしれないね」

ケイちゃんは眉間の間をつまむような仕草をした。

「もう寝るね」

そのまま部屋の電気を消してしまふ。テレビの光だけが残される。

「ケイちゃんは、すごい人だと思うよ」

ボクに背を向けて床にそのまま横になったケイちゃんに、とりあえずそれだけ言った。

ほんまかいな、とテレビから声がする。

おまえはいちいち余計なところで口を出してくるんじゃないよ、と睨む。この世に沈んでいる人がいるなんて欠片も思っちゃいないよ
うな、満々の笑みだった。

そいつをもう一回睨んでから、背を向けたケイちゃんにもう一度声をかける。

「ほんまだよ」

慣れない関西弁は、暗闇に溶けて消えた。

ほんまだよ（後書き）

お疲れ様でした。ありがとうございました。

黄色と白と空の青（前書き）

今回は妹・忍の一人称です。

黄色と白と空の青

私は黄色が苦手だ。

それはあの子の色だから。

私が手を伸ばしていいものではないから。

視界に黄色がちらついてきたとき、これは夢なんだとはつきりわかった。

さつき忍との会話が変な終わり方をして、気まづくなって背を向けて眠った。

歯を磨いてない。化粧も落としてない。服すら、そのままだ。でもどうでもいい。億劫だった。何もかも。

無意味に酸素を二酸化炭素に変えるだけの存在になった私は、忍の寝息が聞こえてくるまでひたすら目をつむって世界を暗くしていた。ペンライトの軌跡が暗闇に線となって残るように、いつの間にか視界に黄色い筋がちらついて、ああこれはいつもの夢なんだと漠然と思った。

黄色は、あの子のヘアゴムの色だ。

長い髪を高い位置で括って、いつも私の前を歩いている子だった。歩むたびに結わえられた髪が揺れ、黄色いゴムがちらつく。

私は黄色に向かって必死に足を動かす。早足に、小走りに、全速力で走って息をきらしても、黄色はゆらゆらとやんわり私との距離を広げていく。

行かないで、とは言えなかった。私は諦めていたのだ。

あの子には追いつけない。私では無理なのだ。

足場は土を跳ね、だんだん泥をくつつけて重くなっていく。

ただ目を見開き、自分を苦しめるだけの鼓動の速さを聞いている私。一度も振り返らないあの子の黄色い軌跡が見えなくなっても、動悸

はちつとも治まらない。

私を責めるように、ひたすら胸は内側から強く叩かれる。
どうして動いているんだ、と。

そんなの、私が一番聞きたいのに。

目が覚めるとカーテン越しの朝日ですでに部屋は明るくなっていて、隣で寝ていたはずの忍はいなくなっていた。玄関とこの一間しかない部屋を隔てる扉の向こうでフライパンが音を立っている。

良い匂いだ。

急に食欲が湧いてくる。おなかですいていたことに気付いた、という感じがする。

お腹がすく。あたりまえだ。生きていれば、食べないわけにはいかない。

「 Кейちゃん、おはよう。ちょうど飯が出来ましたよー」

忍は昨日の朝と変わらない笑顔で私に接してくれる。夜の気まずさをまったく引きずらないでいてくれたことがありがたい。

「今日はスクランブルエッグにしてみました」

忍が机にお皿を置く。鮮やかな黄色。

「あれっ。 Кейちゃん、卵、ダメだっけ」

私の表情を敏感に見分けた忍が硬い声を出す。

「ひよっとして昨日の目玉焼きも、アウトだった？」

「ううん、卵は好きだよ」

忍が早起きして作ったものを手つかずで残すわけにもいかないから、さっきまでの空腹感が嘘のようにしぼんだことはあえて忘れることにした。

忍は私の顔をちらつと見て、自分の分のスクランブルエッグに視線を落とす。

「 Кейちゃんは、今日もバイト？」

「夕方からね」

「じゃあ、午前中は？」

「大学の図書館に行こうと思ってる。昼食は、適当にすませてくるからいい」

「なんか、夫婦の会話みたいだね」

「離婚寸前のね」

箸が皿に当たる音、歯が卵をすりつぶす音がこそこそばかりに大きく聞こえてくる。

「ケイちゃん」

忍は箸を置いて一つため息をつく。

「君はときどきすごい自虐を言うね」

「離婚のこと？」

「ボクらの両親、離婚してんじゃん。しまった、とか思わない？」

「あんまり。忍が気にしてるなら、謝るけど」

「いや、ボクはいいんだよ。10年も前のことだし、それ」

「私もあんまり気にしてないけど。10年って、ほとんどのことは時効になるんだよ。あ、知ってる？口約束って、1年で時効になるんだよ。授業で習った」

「ケイちゃん、法学部なの？」

「法学部ではない。法学科」

「それって、どう違うの？」

「部長と係長くらい、違う」

「なにそれ、全然わかんない」

忍はおかしそうに顔を歪める。さっきまで硬い表情をしていただけに、すぐに笑顔に変換出来ませんでした、というぎこちなさがあつたけど、それでも笑顔が本来持つ光がちゃんと宿ったものだった。

「卵が嫌いだったら、言ってたね」

忍は私の皿にまだ多く残ったスクランブルエッグを見ないようにして、明るく言う。

「ボクたち、たしかにお互いのことよく知らないけど、それって少しずつなら埋めていけるものだと思うんだ。ボクはケイちゃんのこと

「ともつと知りたいし、教えてほしい」

今度は、感情がちゃんと反映されたとわかる笑顔だった。

忍は、やっぱり私よりずっと大人だ。

昨日の気まずさをちゃんと解いて、少しずつ良い方向に進んでいくとする。私にはそれが出来るだろうか。

「卵は、べつに嫌いじゃないの」

どう言っているかわからないけど、私も少しずつでも忍を見習っていかなくちゃいけない。

「夢を見たの」

「夢？」

「黄色い夢」

忍はさっぱり状況がわからないはずなのに、口を挟まずに黙って先を促してくれる。

「ダメなの。黄色い夢を見ると、いつも責められてるような感じがしちゃって。追いつけない私が悪いだけなの。スクランブルエッグは悪くないのに」

自分の説明の支離滅裂さに呆れた。

言葉にするとどんどん夢のリアリティーが遠のいていくのを感じる。意味不明な、寝言の延長線上のものでしかなくなっていく。

それでも、黄色い、あの軌跡は消えない。ゆらゆらと鮮やかに、私のなかに留まって胸のなかを占領する。

ふいに私の皿に忍の箸が伸びてくる。

何事だろうと動けないでいるうちに、箸は忙しく忍との間を往復し、皿はどんどん地の色である白色になっていく。

やがて何もなくなってしまうと、忍は満足げに頷く。

「白くなっ たね」

「・・・そうだね」

忍の口の端には、卵の欠片がひつついている。さっき私の分をすくいペースで平らげたからだ。

「白はあまりにも彩度が高いから、黒と同じで色としてカウントさ

れないんだ。つまりこの皿は今、何の色もないってことだよね」

「・・・そうなの？」

「そうなの」

やけにきつぱりと言い切ってから、ふいに表情を和らげてから言う。
「誰もケイチちゃんのことを責めてなんかいない」

忍は振り返り、背にしていたカーテンに手をかけ、勢いをつけて端に引く。

「今日はいい天気だね。洗濯ものがよく乾きそうだ」

もう一度私を振り返って、忍はまた笑う。

「朝から天気がいいと、いいことありそうな気がしない？」

空は夏の強い光で空をどこまでも輝かせている。その先にあるという宇宙空間さえ青で出来ているんじゃないかと思わせるほど、鮮やかだ。

自分の内側に空の青が流れこんで来る。空の青をバックにした忍がそうさせているんだ。根拠もないのにそんなことを思った。

世界は青い。

私は少しの間、黄色い夢のことも、スクランブルエッグが食べられない臆病な自分のことも忘れた。

ただ忍の青に魅入った。

黄色と白と空の青（後書き）

お疲れ様でした。ありがとうございました。

ボク型、輪郭線（前書き）

今回は、妹・忍の一人称です。

ボク型、輪郭線

「先生、どうでしょう」

年相応の皺を刻んだ顔に若々しい笑顔を浮かべた安曇さんが振り返る。手には新品のスケッチブックが握られていて、安曇さんがさっきまで向かい合っていたリングがモノクロとなって映りこんでいる。

「その、先生っていうの、やめませんか？」

非難の意を込めて、スケッチブックは受け取らずに言う。

「いいじゃないですか。忍さんは僕の絵の先生だし、何も間違っていないでしょう」

「自分より半世紀も長く生きている人に、その、敬称を使わせてしまうのは心苦しいんですよ」

悦子さんの旦那さんである安曇さんに絵を教えるという名目で安曇家に通うようになってからそろそろ1週間が経とうとしている。

ケイちゃんのもとに転がりこんできてすぐに知り合ったことを考えると、ボクとケイちゃんのプチ同棲も1週間を迎えたということだ。一緒に住むようになって改めてわかったことは、ケイちゃんは驚くほど真面目だということだ。日中は毎日のように勉強のために図書館に出かけ、夕方からはバイトに出かける。正直、ボクとの接点はほとんどない。無料のお手伝いさんなんて大口を叩いたくせに、今のところ朝ごはんを作るくらいしか、ボクの仕事はない。

最初ははつきりと感じていたぎこちなさも、今はそんなに目立たなくなっている。

仲良くなったというよりは、ケイちゃん自身がボクとの生活に慣れてきたぶん、自分の我をうまく調整して当たり障りなく接することがうまくなってしまったからなのだろう。

巧妙に壁を築かれている。

挨拶をすれば返してくれるし、ボクが作った料理を残さず食べてく

れることなんかはもちろん嬉しいけれど、いつもこの感覚が離れなかった。

掃除や洗濯も二人分しかないから、ボクの日中は驚くほど空っぽだ。安曇さん夫婦のもとに居場所が出来たことはすごくありがたいだけに、この妙な呼び方はやっぱり居心地が悪い。

「半世紀、ですか。僕が80歳ということは、忍さんは30歳くらいだと考えていいんですか？」

「80歳っ？」

思わず声がひっくり返った。せいぜい70歳か、それより若いとさえ思っていた。

安曇さんはいたずらっぽく笑っている。

「忍さんは30歳でしたか。てつきり、もっと年若いのかと思っていましたよ。見誤ってしまって、どうもすみませんでした」

「・・・それはこっちのセリフじゃないですか。言わないでくださいよ」

安曇さんの皮肉に、ボクの言い方もなんだか捨て鉢なものになってしまふ。

子どものようにいじけてしまったボクに、安曇さんは穏やかに言う。「わかっていますよ。忍さんは20歳前後。僕の見立てでは、19歳くらいということですかね」

「そうです。19歳です。30歳ではありません」

「30歳では、嫌ですか？」

「・・・良い気は、しません」

安曇さんのような達観した年齢では大差ないのだろうが、まだ未成年の冠さえ取れていないボクにとって、20歳と30歳は全然違う。19歳と20歳でさえ天地の差だとすら思う。

年齢を上乗せされたことに不機嫌になるなんて、おばさんのすることだと思っていた。ボクたちは、いつだって大人になることを夢見てきたのだから。

「大人っぽい」ことに憧れ、お酒やタバコみたいな、未知なものに

少なからず関心があった。不良にこの二つの嗜みが欠かせないのも、彼ら自身も自分の年齢にコンプレックスがあったからなんじゃないかと、今ならそう思う。

「20歳になれば、もう大人だからさ」

10年も前にケイちゃんに言ったボクの言葉がふいに蘇る。そうだ。10年前は、たしかに20歳は立派な大人だった。

あのときたしかに確信していた、10年後のビジョンに今のふがないボクは存在しない。

絵の具を絞り出せなくなつてずいぶん経つ臆病なボクは、あの頃のボクの中にはいなかった。

「今のボクが本当に30歳だったとしたら、きっと自分を今よりずっと嫌いになります」

「忍さんは、自分が嫌いなんですか？」

「厳密に言つと、ちよつと違います」

計らずも安曇さんが拝聴の姿勢を取りだしたので、ボクはまた恐縮して話題を逸らす。

「あつ、スケッチまだ見てませんでしたよね。見ます。見せてください」

「忍さんは、自分が嫌いなんですか？」

安曇さんは自分の膝に置いたスケッチブックの上に手を置き、また同じことを言つた。さっきと同じセリフ。なのに、ボクはスケッチブックを無理にでも取り上げようとしていた手を止めた。

安曇さんが先生をやつていたというのに、今、納得した。

この人は知っているんだ。答えを全部知っていて、ボクがどこつまづいているのかもわかつていて、それでも問題を出す。

試すために、ではない。導くために。

だから、ボクは口を開いた。少しだけ、かすれた声だった。

「昔、何かの教科書で、読んだことがあるんです。自分はいつたい、何者なのかって」

ボクがケイちゃんのもとに転がり込んだのには、ボクなりの理由が

ある。それは確固としたもので、今でも疑いようないものとしてちゃんとある。

でも、それはあくまで理由であって、動機ではない。

「私は・・・幼い頃からずっと、自分のことをボクと呼んでいました。今だって、親しい人にはボクという呼び方をしています。この年齢になれば、いい加減それがおかしいってことくらいわかっていきます。現に、安曇さんには意識して自分の一人称を出さないように気を遣っていました。悦子さんにはボク呼びで話しましたけど、それも最初はもう会うこともない縁だと思っていたからです。楽なんです、その方が。私という呼び名では、窮屈なんです」

自分が女子だというくくりをされることに抵抗を感じた。

でも、だからといって男子になりたいと思っただけではない。

10歳まではまったく同じように育ったケイちゃんが、普通の女の子がそうしているように、自分のことを「私」と呼んでいることに不満や不思議があるわけでもない。

ボクとケイちゃんが違うことなんて、当たり前だ。ボク自身、ケイちゃんにそう言った。わかっている。

「ボクは、今までずっと自分と人が違うと思っていました。呼び名なんてわかりやすい違いじゃなくて、もっと根本的に、安易な同調が嫌いだったんです。いつだって厳密を追っていたかった。一般的に、『こうあるべき』人物像に自分を当てはめて、誰かと自分を重ねわせて、そっくりさんになることが嫌だった・・・ボクは世界に一人しかいないことを、ボク自身、誰より強く感じていたかったです」

絵を描くことが好きだった。他の誰でもない、自分だけの世界を紙の上いっぱい広げて、ボクはそこに色を乗せていくときにだけ、自分という輪郭をはっきりと掴むことが出来ていた。

「あるとき、自分の描いた絵と他人の描いた絵の見分けがつかなくなりしました。それが理由だったわけではないと思うんですけど、でもきっかけになるには充分でした。美大って、すごいところですよ。」

絵のうまい人がいくらでもいる。自分の存在意義は絵だつて断言出来ちゃうような人がボクの他にたくさんいて、入学した頃は何でもなかったはずなのに、ある程度技術を得て、いざ世界観を求められるようになってから、自分があんなに主張したかったはずの自分自身が、わからなくなってしまうんです」

今までボクが違つと信じ込んできた、ボクと人との差。そんなもの、なかったんじゃないのか。

ボクは大量生産された製品のうちの一つで、シリアルナンバーだけが「隣」と「ここ」を区別してくれる、それだけの存在。

そして、シリアルナンバーだと信じて疑わなかった「絵」が、実は値段とか、製造日とか、そんな無関係で無個性なものだった。そう思い知らされた。

「自分は何者なのか、ボクはずつとそれを知りたかった。それは、きつとボクが自分のことをちゃんと認めたかったからなんです。取るに足りない存在じゃなくて、自分でくらい、胸を張って自分を認めてあげられるようになりたかったから。そうじゃなきゃ、心細くてしかたなかったんです」

10年も経ってからケイちゃんに会いに来た「動機」は、ボクとケイちゃんがどれくらい違う人間になったのかを見せつけてほしかったからだ。

美大なんて回りくどい場所じゃなく、社会で求められているような知識を学べる大学に入り、誰の前でも同じ「私」という呼びを自分に当てはめ、ブレることなく熱心に勉強をして高みを目指しているケイちゃんを見て、ボクはたしかに誰かと違うことを、こんなにも違うことを、思い知りたかった。

「どうして人と同じじゃダメなのか、自分でもわかりません。自分が特別な人間だなんて、思っているわけではありません。それでも、ボクは」

自分の輪郭を掴んでいたかった。
水で滲ませると塗り分けた絵の具がどんどん混ざっていくように、

拡散させていくことが怖かった。

他人と同じ、違いがない、ボクがボクじゃなくても誰も、自分ですら困らないのなら、それはとても怖いことだ。存在を否定されたのと同じことだ。

だからこそ、ボクという呼び名が、絵という手段が、ケイちゃんという存在が、見原忍という人間に輪郭を与えてくれるのだと、ただ信じていた。

「もし仮に今のボクが30歳だとしたら、それは嫌です。10年前、まだ10歳の子もだった頃に思い描いた大人に、今のボクはなれていない。20年経つてもそのままだとしたら、今よりさらに10年ぶん、ボクは自分が嫌いになる」

安曇さんの膝に置かれたスケッチブックが目に入る。リンゴを模写したものだ。この1週間で、すぐく上達した。もともとセンスがあるとは思っていたけど、この短期間にここまでのレベルが出来あがるとは思ってもみなかった。

でも、デッサンが仮に物体を模写するだけの手段であるなら、写真を撮るのが一番手っ取り早い。無慈悲なまでに正確に、カメラは3次元をコピーしてみせる。

それなら、どうして図工の時間でデッサンなんかするんだろう。

建物の廊下に飾られるのが写真ではなく、高いお金を出してでも絵なのはどうしてだろう。

その理由を、今のボクは説明出来ない。

いつかこの矛盾に世界中の人たちが気がついて、絵という絵が燃やされることをただ恐れるだけだ。

こんなにも不確かで無価値なボクに誰かが気付いて、ゴミ箱に捨ててしまうのを漠然と待つしかないように。

「70歳と80歳では、違いますか」

安曇さんがゆっくりと口を開く。何が言いたいのかは、わからない。「違うと思います。その、10年くらい」

「でも、忍さんはさっき、僕の年齢を間違えていましたよね？10

年は全然違つと言いながら。どうして間違えたりなんかしたのですか？」

「それは、失礼なことをしたとは思いますが。でも、それは安曇さんそれだけ若々しかったからです」

弁解口調になりながらも、内心では非難したい気持ちですらいた。この人は何が言いたい？挑発しているのか？それとも、本当にボクが年齢を見誤つたことを引きずっているのか？

「僕は、そうは思いません。年齢というのは、他人からしてみればひどく曖昧なものです。責めるつもりはもちろんありませんが、忍さんが勘違いをしていたのがいい例です」

ですから、と安曇さんは区切ると、諭すような穏やかな笑顔を変えた。ボクが間違えてしまったときと同じ、いたずらめいた笑顔になった。

「僕は忍さんを先生と呼ぶ。これまでどおり。そして、先生は僕の前でも自分を偽つた呼び名をしない。それでいきましょう」

あまりにもぶつ飛んだ結論だっただけに、ボクは今までしてきた話の内容を、すっぽり忘れてしまった。

「・・・そういう問題ですか？」

「ええ。そういう問題です。さっきも言つたとおり、年齢なんて些細なものです。だから僕が忍さんを先生と呼ぶことに何の支障もない」

自分の掘つた落とし穴に人が落ちることをシュミレーションしている子どものように、自分の名案に目を輝かせて、安曇さんはそう言い切った。

ため息をついた。自然と、そうしていた。

「・・・好きにしてください」

「怒らせてしまいましたか？先生」

「ええ。あなたはどうか知りませんが、ボクとしてはけっこう、真剣に話したんですから」

投げやりに言つて、「ボク」という呼び名を変えていないことに気

付いた。

今さら「私」に戻すのは面倒だ。だって、この人がこんな調子なんだから。ボクだけ義理を通してやることはない。

「さて、そろそろお腹が空いた頃ではありませんか？先生のためにケーキを用意していますから、下に降りましょうか」

「それじゃ、遠慮なくご馳走になります。ボク、ケーキ好きですから。もう何の遠慮もしてやりません」

「それは頼もしい」

肩をいからせて階段を降りながら、やけに身軽になったような気がして、不思議だった。

ボクは何かを失ったのだろうか。そんな気が少しもなかったから、不思議で仕方なかった。

ボク型、輪郭線（後書き）

書いていてこんなに登場人物に共感出来なかったのは初めてです。やっぱり、自分とは離れたキャラ作りというのは難しいですね。ここまで読んでくださって、ありがとうございます。

沈まない藁、沈んでいく煙（前書き）

今回は姉・恵の一人称です。

沈まない藁、沈んでいく煙

珍しいことというのは、どうやらお互いに興味があるかのように、重なる。呼び合う。

「ケイちゃん、あの席のオーダーお願い」

リンダさんが声を張る。決して大きくはないけれど、普段のマイペースな彼女からはかけ離れた、ピリピリしたものだった。

夏休みになってからはほぼ日課となった、バイト。

でも、今日は開店した途端にお客さんが入って来て、いつも鳴いている閑古鳥が不気味なほどに鳴りをひそめている。いろんな人の談笑でBGMはかき消されている。

タバコ臭い。照明付近では、白い煙がくつきりと浮かんでいる。店中の人々がタバコを吸っている。居酒屋なのだから、不自然なことではない。

こんなに混むのは久しぶりだ。

リンダさんからオーダーを引き受け、失礼いたします、と声を出す。営業用の、愛想を込められるだけ込めた声だ。タバコの充満した室内で出し続けるのは、正直キツイ。

「生をお一つ、ウーロン茶をお二つですね。お持ちいたします」

につこりと告げてから、早足で厨房へと向かう。店内でも店員は忙しそうに動いているけど、お客さんの目のない厨房となるとなおさら動きは速く、そしてイライラしたものになっている。

「ああ、もう。なんでこんなに忙しいかな」

私と同じようにドリンクの注文を受けたリンダさんが生ビールを汲みながらぼやく。リンダさんは人一倍愚痴を言うけど、人の2倍は働く。現に、私が受けた注文であるウーロン茶はすでにグラスに注がれ、あとは氷を入れるだけになっている。こういうのを、気遣いと言っただろうな。

お礼を言ってから、「今日はお祭りが近所であるそうですからね、

その帰りの客が入って来てるんじゃないでしょうか」と返した。

「お祭り、ね。酒飲むような年齢になっても、そんなのに集まったりするもんなのね」

「けっこう大きいやつみたいですよ。子ども向けていうよりは、観光客を目当てにしているみたいです」

「どっちだつて一緒だよ。迷惑なことには変わらない」

ビールに泡を入れたリンダさんは眉間にしわを寄せて店内へと帰っていく。あんなにぶつきらばうに言っているても、ビールを運んだ先のお客さんには店員の模範の、奉仕的な笑顔を浮かべてしまえる。こういうのを、大人と言うんだろな。

ウーロン茶を運ぶ。料理を運ぶ。会計をする。レジキーを叩く。空になった席を急いで片づける。玄関で待っているお客さんをまた通す。繰り返し、繰り返し。

声を出すたび、笑顔を作るたび、足をせわしなく動かすたび、私の体にタバコの匂いが入ってくるのがわかる。

汚染されている。そう感じないわけではない。

笑顔で受動喫煙。呼吸するたびに自分が汚れていくような感覚に、それでも私はにこにこ笑ってタバコを吸う相手に接する。

バイトを始めたばかりの頃は、この匂いが嫌で仕方なかった。健康うんぬんという理屈抜きで、内側から浸食されていくような気がした。自分がどんどん汚れた人間になっていくんじゃないかと、半ば本気で思っていた。今思うと何ともバカバカしい。喫煙者が穢れていると言わんばかりの傲慢ささえ窺えて、かえって申し訳なささえある。

タバコくらいじゃ、人は汚れない。

それなのに、今でもときどき、あの感覚が体中を駆け巡り、「私は汚れている」とふいに思うことがある。

そして、それはタバコの匂いからはほど遠い、真夜中の公園で感じる事となった。

バイトを終え、一度に一人しか入れない「物置兼・更衣室」でリンダさんが着替え終わるのをその外で待っている間に携帯を開いて驚いた。

千佳から着信が入っている。それも3回。履歴を見ても、思いつきでかけてきたとは思えない秒数が記録されていた。

メールは2通入っている。

一つは千佳から。「ごめんね」の一言。普段絵文字をふんだんに盛り込んでいる千佳からは考えられないくらい、白い文面だ。

もう一つは忍からだ。「早く帰って来て」と、これまたこの一行。忍からのメールはこれが初めてなので、正直どれくらい深刻なのかはわからない。

いたい、ということなんだろう。私はどっちに行けばいいんだろう。

混乱している私のすぐ傍で、カーテンが音を立てて開かれる。リンダさんが着替えを終えたのだ。

「・・・どうしたの」

疲れきっているリンダさんは、とりあえずそれだけ言った。よほど私の混乱が顔に出ていたのだろう。疲れた彼女が自分から口を開くことは珍しいから。

「着信が入ってて・・・メールもあつたんですけど、それが二人からかかってきてて、どっちに行けばいいのか、わからなくて」

「電話はした？」

「あつ」

言われるまでまるで気付かなかった。かけようとして、ふと思いとどまる。

「リンダさん、先に帰っててください」

「いいよ、終業まであと3分あるし。3分経ったらタイムカード押して勝手に出ていくから。電話しちやいなよ」

「押しておきますよ、タイムカードくらい」

早く帰りたいと連呼しているわりに、リンダさんはこういう、手を抜いてもばれないところで真面目だ。

「グラス拭いたりしてれば3分なんてあっという間だから、いい」

「あっ、私もグラス、拭きます」

「いいよ、こんなの一人で充分なんだから。その子ら、待ってるんでしょ？早くかけてあげなよ」

こつちを見ずに手だけで「早くしろ」という仕草をするリンダさんに頭を下げてから、携帯を操作する。まずは千佳からだ。

何拍かの沈黙のあと、「おかけになった番号は現在電源が入っていないか・・・」というやたらと人を不安にさせるアナウンスが代弁してくる。

次は忍にかけた。

さつきとは違い、ちゃんと呼び出し音が聞こえてくる。

焦れるような間を空けてから、ようやく「ケイちゃん？」という忍の声が聞こえてきた。やけに弱い。

「さつき電話かけたよね？どうしたの？何かあった？」

「うん、ちよつといういろあつて・・・とりあえず、会ってから話す。今、大きな公園にいるんだ」

忍がこんな日付の変わりかけた時間に公園にいるという状況にも驚いたけど、千佳のことを思うと「困ったな」と頭を抱えたい気持ちになった。忍のところへ出向いたぶん、千佳の問題に取りかかるのにタイムラグが出来てしまう。でも、それは逆のパターンでも同じだ。

二人とも、様子がおかしかった。

着信と短いメールただけだけど、それがかえって緊急事態の証しのように思えてならない。

2人同時に会える方法があればいいのに。

まさにそう齒がみしたときだった。

「千佳さんって、ケイちゃんの友だちなんですよ」

忍の、さつきと変わらない疲れ切った声に、すぐに言葉が出てこな

かった。私のリアクションなどお見通しと言わんばかりの滑らかさで、忍は続ける。

「ボクと千佳さんの両方から連絡入ってたでしょ？でも大丈夫。これからボクが言うところに来てくれればいいから。ボクたち、今一緒にいるんだ」

忍と千佳が、一緒？

「さっきも言ったけど、会ってから話す。だから早く来て。千佳さんのために」

忍は私の住むアパートとこの店の中間地点にある公園の名前を告げ、私がそこを知っていることを確認すると、早々に切ってしまった。通話を終えてからも呆然と突っ立ったままの私の前に、きっちり3分働いたリンダさんが現れる。

「緊急事態？」

「・・・多分」

リンダさんはタイムカードを二人分入れながら、「疲労」という感情しか伺えない声で「そりや大変だ」と素っ気なく言った。

「それじゃ、すみません。お先に失礼します。グラス拭くの、お手伝い出来なくてすみませんでした」

玄關口に出た途端に頭を下げて走り出そうとする私を、「ちょっと待って」とリンダさんが呼びとめる。

「忘れ物」

握られた手が突き出され、それがぱつと開かれる。反射的に手を出して受け取る。

「飴玉、ですか」

「今日忙しかつたでしょ。調理場の人から。ケイちゃんにつて」
「これ、二つありますけど、リンダさんの分なんじゃ・・・」

「私はもうもらった。これはケイちゃんのぶん」

忙しい日の差し入れは、べつに珍しいことではない。大抵が、今日のような飴玉だ。でも、二つというのは珍しい。

「そうですか、ありがとうございます」

心ここにあらずな状態の私は、深く考えることもなく走り出した。

夜の公園は、予想していたより不気味ということではなかった。このあたりで今日、日付としては昨日、お祭りがあった名残りなのだろう。普段はない提灯なんか吊り下げられていて、人気がないうら寂しさを慰めているようだった。

ベンチに腰掛けた二人を見つけ、息を切らして駆け寄った私に最初に声をかけたのは、千佳だった。

「恵」

明かりの消された提灯がいくつも頭上にぶら下がり、変わることなく働き続ける街灯だけが千佳を頼りなく照らしている。

でも、千佳の顔に影が深く出ていたのは、弱い照明のせいだけではないことは明らかだった。

「千佳・・・」

お腹のあたりに、どん、と衝撃を受けた。ふらつく。千佳が抱きついてきたのだ。

ベンチに腰掛けたままの忍が小さく息をつくのが聞こえて、千佳から視線を移す。

「ケイちゃん来たから、ボク、先に帰るよ」

私と、私にしがみついている千佳の横を通り過ぎるとき、ふいに忍が身をかがめて千佳にささやく。

「何か温かいスープでも作っておきますから。ケイちゃんの家へ寄ってくださいね」

私のお腹のあたりに顔をうずめた千佳が頷くのがわかった。

「じゃ、そういうことから」

忍は業務連絡を告げるように平淡な声でそれだけ言って、本当に帰ってしまった。

何が、そういうことなんだ。来たら私に説明するんじゃないのか。私は、ちっとも状況がわからないままだ。

おろおろと所在なく視線を彷徨わせ、抱きついたまままったく態勢を変えない千佳のつむじあたりを見下ろす。

「千佳？」

今になってようやく、千佳が小刻みに震えているのがわかった。

「遅くなつてごめんね」

千佳の頭を撫でてから、そっと体を動かし、さっきまで二人が座っていたベンチへと移動した。千佳もとりあえず足だけは動かしてくれたので、おかしい態勢だったけど、二人で座ることが出来た。

「よしよし、寒かったね。夏って言っても、夜は半そでじゃ、ちょっと冷えるもんね」

私は未だに顔を上げない千佳に向かって、世間話のような気楽さで声をかける。

千佳は泣いている。押さえ込んでいるつもりでも、振動は正確に、千佳の声にならない声を伝えていた。

溺れる者は藁をも掴む。私は、藁になった気がした。

千佳は今、溺れているようなものだ。苦しくて、動転して、体は思うように動かなくて、たまたま近くにあった私を掴んだ。それが自分を助けてくれるものとおよそかけ離れたものであることにも気付かずに、ただがむしやらに。

私は藁だ。藁に出来ることは、ただ一緒に沈んでいくことなんだろう。

「寒かったね」

私は千佳の頭を撫でた。

何があつたの？どうして泣いてるの？私に何をしてほしい？聞きたくなかつたわけじゃない。でも、こんなに弱弱しく震えている千佳に、タバコの匂いを全身に沁みこませた私が踏みこんでいくのは躊躇われた。

「ごめんね」

「・・・恵が謝ること、ないでしょ」

籠った声で、小さく千佳はそう言った。

「何があつたか、聞かないの？」

「教えてくれるんなら」

「っていうか、聞いてほしいのよ。聞いてよ早く。私、なんかバカみたいじゃない。抱きついちゃってさ、ガキじゃん。恥ずかしいあー」

千佳はようやく顔を上げ、私から離れた。俯いたまま、軽口を叩き続ける千佳は、私に抱きついていたときよりずっとか細く、儂い存在に思えた。

「悪かったね。バイトだったんでしょ？」

「着信、くれたみたいだね」

「うん。最初は秋穂にかけてーなんかつながらなくてさあ、そんで皐月にかけたら今彼氏と一緒にだとか言うから、恵にかけたわけ」

「私は最後かい」

千佳の口数が多くなってきたことにつられるように、私も声を弾ませた、つもりだった。

内側から汚染されていくあの感覚が蘇って、尻すばみになってしまふ。

私は最後。言ってから、煙がもくもくと体中に浸みわたっていく。期待していた。千佳が私を頼ってくれたんじゃないかって。

私は気も利かない、何も出来ない、藁みたいに頼りないやつだけど、それでも必要としてくれるなら、それでいいと思った。

手を離してやるうか。

ふいに、煙が言葉を持った。

私は藁だけど、一人なら浮いていられる。

千佳を置いて、この寂しい夜の公園に置き去りにして、一人で帰ってやるうか。

千佳はきつと沈む。私はそれを水面から見下ろしてやればいい。

「ごめんね」

一瞬、誰の発した言葉かわからなかった。

真夜中の公園に、声の届く範囲にいるのは千佳だけ。それなのに、

ほんの少しの間だけとはいえ、それが千佳の言葉だとは認識出来なかった。

「私、今、ひどいこと、したね」

ああ、まただ。

これは千佳の声。千佳が私にくれた言葉だ。私が千佳に言いたくて、でも言えなかった、きれいな言葉だ。

「ひどいことって・・・べつに電話くらいいつでもしてくれていいよ。今回は、たまたま出られなかったってだけで」

目をそらした。千佳の言葉の真意から。私を見つめてくる、真摯なまなざしから。

煙が充満していく。でも、それは私の中でだけだ。はっきりわかる夜の澄んだ空気の中で、どうして私だけがこんなに汚れていくんだろ。

「携帯にはさ、けっこう連絡先、あるんだ。私、自分で言うのもどうかと思うけど、顔広い方だし。だから恵じゃなくて他の、すぐにも駆けつけてくれる人に電話して、愚痴って、それですっきりしてさっさと帰ればよかったんだけどね、出来なかった。いざとなつたときに電話をかけたかと思える人が、泣き顔見られてもいいって思える友だちが、いなかったの。恵だけしか、思いつかなかった。そうわかったら、なんかショックだった。私、友だちなんてたくさんいると思ってた。今まで自分で作り上げてきたと思ってた関係がこんなに薄っぺらだなんて、思わなかった。だから・・・」

そらした目を、いつまで経っても千佳に戻せなかった。

千佳の震えて切れ切れな言葉を聞くたびに、煙と、もっと得体の知れないものが私の中を塗りつぶしていくのを感じた。

それは掴みどころがないくせにたしかな質量を持って全身を覆っていき、私はわけもわからず指が震えて、それが嫌でこぶしを握った。千佳の手を握る気にはなれなかった。触れた拍子に、このわけのわからない何かが千佳に伝わってしまうような気がして、それが怖かったからだ。

叫びだしたかった。千佳にこれ以上話してほしくなかった。聞きたくない。逃げ出して、そのまま消えてしまえたらどんなにいいだろう。

「だから、何も聞かずに、バイト終わって疲れてるはずなのに、無条件で私に優しくしてくれる恵が、すごく憎たらしかった。傷つけてやりたかった。引きずり落としたかった。私よりずっと低いところに落として、それを見下ろしてやりたかった。だから嘘ついた。恵が最後の連絡先なんて、嘘。だって、恵にしかかけてないんだもん」

千佳は力なく笑って、それから長く息を吐いた。ため息とは違う、体の中の空気を丁寧に時間をかけて入れ替えているような間だった。「こういう気持ちって、わかる？」

千佳の声は、もう震えていなかった。

私は声を出せなかった。今何か喋ったら、震えてしまうに違いないわかるよ。だって、私、千佳を突き放そうとしたもん。

自分が傷ついたから、相手をもっと下に落としてやりたい、こんなに惨めな自分にももっと下がいると安心したい。

そういうむなしい衝動、私にもわかる。だからこそ、千佳からは聞きたくなかった。

だって、千佳は私に謝った。自分の汚い感情を認めて、受け止めることが出来た。

ごめんねと言われたとき、私がどれだけ自分を嫌いになったか、千佳にはきつとわからないだろう。

自分の非を認めることの難しさ、それが出来る美しさが、どれだけ私を醜く映すか、千佳には絶対にわからない。

「わかんなくてもいいの。っていうか、恵は優しいから、こういうどうしようもない人間もいるってことだけ肝に銘じておいてくれればいいから。そういうやつに傷つけられないように用心してほしいってだけ」

ま、そういう人間って、私のことなんだけどさあ、とおどけて笑う

千佳の目を、結局私は見ることが出来なかった。
弁解するチャンスなら、ちゃんとあったと思う。

私は千佳が思うような出来た人間じゃなくて、むしろその真逆で、千佳の潔さが羨ましくて、でもそれを口に出して認められない臆病者なんだよ、と。

とうとう言うことが出来なかったのは、千佳に嫌われたくなかったからではないと思う。

自分で自分のちっぽけさを認めてしまうのが怖かったから。ただ、それだけ。

煙は渦巻く。

光を受けて初めて、こんなにも濃くあるのだとわかる。

息を吐いたら、白く濁る気がする。

沈まない藁、沈んでいく煙（後書き）

かつてないほどの長さになってしまいましたので、ここまで辿りつく方はいないかもしれませんが、私としてはようやくキャラクターが掴めてきた感じなので、一人息をしております。またの機会がありますように。

ケーキを食べられないアントワネット、迎えの来ないシンデレラ（前書き）

今回は妹・忍の一人称です。

ケーキを食べられないアントワネット、迎えの来ないシンデレラ

携帯を開いた途端、なぜか向かい合って朝食をつついていたケイチやんが反応した。

「忍、どうかした？」

「え？なんで？」

「だって、あんた今すごく苦い顔してたわよ。露骨に。メール？それともあんたの皿に乗った焼き魚だけ生きてたの？」

「えっ・・・魚・・・うん、死んでると思うけど」

「冗談だよ。わかってるよ、そんなこと」

妙な沈黙が降りる。

ケイチちゃんは、たまにだけど冗談を言うようになった。辞書の「真面目」という欄から抜け出してきたようなケイチちゃんが、サバの切り身に対して「生きてたの？」と言うようになったなんて、来たばかりじゃ考えられない進歩だ。

いつもなら嬉しくなつて「うん、今はやっぱり長寿の時代だからね。年金もらわないうちに死んじゃうなんて、サバも浮かばれないだろうし。あれ？サバって、浮いてるって言っているのかな？泳いでるって、要は水に浮かぶってことだもんね。ケイチちゃんはどう思う？」
くらいのことをボクも返すのだが、今回はそういうわけにはいかなかった。

「んー、なんか面倒臭いメールが入っちゃってね」

ボクは何でもないことのように言つて、携帯を閉じる。
見るんじやなかったな。

ため息をつきそうになつて、ケイチちゃんと向かい合っていることを思い出してやめる。出ていかなかった息は、ボクの中をぐるぐると循環するんだろう。ホントに、勘弁してほしい。

「そつえばさあ」

先に沈黙を破つたのはケイチちゃんだった。これもすごい進歩。今ま

でなら貝のように口を閉ざしたままだったというのに。

喜んでいるのを気付かれないように抑えつつケイちゃんの言葉を待って見たものの、出た言葉はボクが一番ほしくない情報だった。

「今日、うちのバイト先の近くの公園で、観光客向けの大きいお祭りがあるらしいよ」

「お祭り・・・？」

嫌な予感がする。思わず、傍らに置いた携帯をちらつと見てしまった。

「私も忍を観光案内とかしてあげるべきなんだろうけど、今はちょっと立てこんでるからさ。良い機会だし、思い出作るのにいいかなって思っ」

「それって、ケイちゃんも来てくれるんだよね？」

おそろおそろ、という感じで聞いてみたのに、返事はなんとも予想通りだった。

「ごめん。私、今日もバイトなんだ。夕方から始まるお祭りだからさ、ちょうど時間被っちゃって。でも、本当に観光客向けだからさ、この辺の地理に詳しくなくても充分楽しめるみたいだよ」

ケイちゃんはさつきサバが生きてるだの死んでいるだのというくだりでは見せなかった、自然な角度で口角が上がっている。

純粋なボクへの思いやりだけがそこにあって、だからこそ「その祭には行かない」という選択肢は消えつつある。

ぶつぶ、というバイブ音と共に、傍らに置いた携帯が光る。開くまでもなく、さつきのメールと差出人が同じであることは予想出来た。「楽しんで来てね」

ケイちゃんの柔らかい口調に、ボクは何も言えなくなってしまった。冗談を言えるようになったケイちゃん。

沈黙を自分で破れるようになったケイちゃん。

それは本当にボクに心を許してくれたからではなくて、精一杯「きようだいらしく」あろうと頑張ってくれた結果なんじゃないのか？ケイちゃんって、どんな性格だったっけ。

リラックスするのと、無理をしてリラックスしているように見せている、その違いはどうやって見分けるんだっけ。

死んだサバの切り身をつつきながら、ボクは押しかけたときでさえ湧いてこなかった疑問に一人、ため息を呑みこんだ。

吐き出しそこねた何かがまたボクの体をめぐる。

それでも、さつき呑みこんだものよりずっと濃いのは明らかだった。

「おい、見原、こっちこっち」

帽子を目深にかぶったというのに、この人ごみのなか、そいつはすぐにボクに気付いて手を振ってきた。

「そんなに大声出さなくても聞こえてますって」

眉間にこれでもかとかばかりに皺を寄せて投げやりに答える。それでも、これ以上大声を出して呼ばれたのではたまったものではないので、ボクは小走りになってそいつに近づく。

「えっ、見原、こんなに混雑しててもおれの声を聞き逃さないってか？それ、アレだよ、完全におれに惚れちゃってるよ」

小走りの状態から右足を後ろへと引き、「まわれー、右っ」の号令を自分にかけてそのまま何も見なかったことにして帰りたいという衝動に駆られる。

ふいに腕を掴まれた。

「・・・触らないでくれませんか？」

「ほら、この人ごみじゃはぐれちゃうつしょ。こうするのが一番効率良いわけ。それとも、やっぱ照れる？恥ずかしい？」

無言で腕を振り払う。ついでに無事だった方の手で触られたところを払う。欲を言えば消毒して除菌したいくらいだけど、夏祭りで賑わう場所に殺菌ボトルを持ってきているはずもない。

「見原は相変わらず冷てーなあ。お世話になってる先輩相手に、それってどうなの？」

そいつは無駄にデカい体がかがめるようにしてボクを覗き込んで来

る。こういうとき、自分の背がしょせん女子の範囲を出ないことを
すごく恨めしく思う。こんなやつより自分が小さいだなんて、たと
え不可抗力でも腹立たしい。

「先輩にお世話になった覚えなんて、ありませんけど」

「いつの時代も後輩はそう言うんだよなあ。人というものはだな、
見原、やられたことは忘れてもやったことは忘れないものなんだよ」
「普通逆でしょう」

「そんなこと言っちゃっても、結局おまえ来てくれたじゃん？やー
さしー」

そうだ、おまえがあんなメールを寄こさなければボクだってこんな
に苛立つてなかったよ、と心のなかで毒づきながら睨む。

今朝のメールの差出人はこの男だった。

用事があつておまえの滞在先の近くに来ているけど、有名なお祭り
があるって聞いたから、ぜひ案内してほしい。だいたいそんな内容
だった。

なんでボクがこいつなんかと一緒に祭を回らなくちゃいけないんだ。
「ついでです。このお祭り、人に勧められたんです。そこに先輩か
らメール入って、案内しろだなんて言うからですよ。断るのも悪い
じゃないですか」

「なにになに？おれに気を遣ってくれたわけ？」

「お祭りを教えてくれた人にです」

言いながら、何もこいつと一緒に回ることはなかったんじゃないか
と、ふいに気付いた。ボク一人で回ればこんなに不愉快なやつと一
緒にいらなくてもいいし、ケイちゃんにも義理が立つ。そんな簡単な
ことにも気付かなかつただなんて、どうかしている。

「そのお祭りを教えてくれた人ってさ、例のおねーさん？」

「紹介しませんからね」

イライラしていることを隠さないボクに、向こうはペースを崩さな
い。

「見原、おまえさあ」

「何ですか。女の子の紹介ならしませてば」

「こつちに来て、目的、達成出来たわけ？」

思わず歩を止めていた。

ボクを1歩追い抜いたやつがボクをまた覗き込む。

「どうなの？」

こつちの反応を楽しんでいるのがありありとわかるにやにやした表情。

やっぱり、こいつは最悪だ。

長谷川哲。それがこの男の名前だ。

二つ年上の先輩にあたるけど、サークルが同じわけでもなければ授業が被っているわけでもない。本来ならば会わずにすんだほど、関わりのない間柄だった。

「この絵を描いた見原忍って、君だろ？」

廊下の壁にかけられたボクの絵の前で、長谷川はやけに慣れ慣れしく声をかけてきた。それが始まりだった。

入学して間もなく作品を完成させるようにと課題を出された1年前のことだ。

その頃のボクはまだスランプの影をほとんど感じておらず、目指していた美大に入れた喜びも手伝って、絵を描くのが好きだった。大好きだった。絵を描くことが出来れば、他に何もいらないとさえ思っていた。昔のことだ。

「いろんな色混ぜたんだね。これって、夜空がモチーフなんだろう？ピンクがベースになってるなんて面白いね。すごく目立ってる」

ボクに話しかけているのか、それとも食い入るように見ている絵に語りかけているのか判断に困るような光景だった。

警戒を隠さないボクに、長谷川はどこか浮世離れた笑顔を浮かべて近づいてきた。

「面白い絵を描く人間は私生活も面白いというのが持論なんだ。君

はどうなの？」

初対面の人間相手にこんなわけのわからない質問をぶつけてくる時点でおかしいのだ。そのとき気付くべきだった。

それなのに、そのときのボクは妙なところで反応してしまった。

「面白い、ですか。その絵」

「うん。なかなか印象的だ。こんなにたくさんの絵が並んでいるのに、この廊下を通るたびに目につくんだよね」

1年生の作品が大きさも様々に並べられていたその中で、廊下のなかほどの中途半端な場所に飾られたボクの絵を見つけ出した人がいた。

「奇遇ですね」

ランプの神経衰弱で、ノーヒントでペアを見つけられたときによく似た高揚で、気が付いたら口を開いていた。

「ボクもその絵を描いていたときは、面白かったんです。すごく」

長谷川は一瞬だけ驚いたように目を見開いたあと、楽しそうに微笑んだ。

「思ったとおり、君って面白い」

それ以来、やつはボクに何かと関わるようになった。

「先輩こそ、どうしてこっちに来たんですか」

早足になりながら人ごみのなかをあてもなく歩く。

「ちょ、見原。歩くの早くね？それじゃー屋台とか楽しめないじゃん」

「寄りたいのならどうぞ、遠慮なさらずに」

「おまえ、おれが止まったらそのまま置いてく気だろ」

当たり前だ。誰が好き好んでおまえなんかと一緒にいたがるもんか。ちよつとでも距離を取ろうと懸命に足を動かすボクに、それでもやつは苦もなく着いてくる。足の長さが違うのだ。本当に腹が立つ。

「なー、おまえにいいこと教えてやろうと思うんだけどさ」

「何ですか。来週の宝くじの当選番号なら知りたいですけど」

「そういう物欲丸出しなのって、美大生としてどーなの？芸術を志す人間としてだな、問題があるとおれは思っね」

「女たらしの先輩に言われたくありません」

「おれが女たらし？何言ってんだ見原、男なら女が好きなのは仕方のないことだろう」

否定しないのは潔いというよりは、ただ図太いと言うほかない。

この男と知り合ってから１年ほど経つけど、その間こいつの隣にいた女はボクが知るだけでも１ダースを超える。

もちろん、ただ隣にいただけではない。親しげに腕を組んだり、耳元に囁きかけていたり、傍から見ていてこっちが目を逸らしたくなるような「いかにも」な雰囲気垂れ流しにしている女が、だ。

「なーんだ、見原、おまえまさか妬いてたの？だからそんな機嫌悪かったの？」

「どこをどういじればそんなふざけた解釈が出来るんですか」

「じゃ、八つ当たりだ」

「はあ？」

ふいに腕を強く引かれた。重心が傾く。

何すんだっ、と怒鳴ろうとして、すぐ目の前を自転車を横切ったのがわかった。

「ちゃんと前見て歩けや見原。お祭りではしゃぐのはわかるけどさ」

「・・・すみませんでした」

言ってやりたいことは山ほどあったけど、小学生の頃お小遣いをつぎ込んだガチャガチャのようにな、一度に一個しか出てこない。

二個目三個目を取りだそうとするのを、長谷川が遮る。

「いいこと教えてやるって言っただろ？まあ聞けや」

「いいですよ、べつに興味ないです」

「おれがこんな大学から離れたところにまで来た理由。それはだな、見原の様子を見るためだ」

「・・・嘘ですね」

「嘘ではない。それがすべてではないというだけだ。おれもまさか後輩の遠出を心配して自分まで出かけて行けるほどの暇人ではないからな」

要するに、ついであつてことじゃないか。恩着せがましい言い方をしやがって。

「わざわざ様子を見に来てやったというのに、見原はここに来た目的をまだ達成出来ていないと見える。それでおれに八つ当たりをする。芸術家を目指すうんぬんの前に、そういうのは人としてどうなんだ見原、ん？」

自分の中にまたガチャガチャのカプセルが流し込まれていくのがわかった。

その透明な部分からは「誰も来てくれなんて頼んでない」とか「回りにくい言い方をしやがって。結局は暇人なんだろうが」とか「こちの事情を知らないくせに、面白半分で関わるな」なんてセリフが垣間見えたのに、出てきたカプセルはこんな言葉だった。

「私はべつに、芸術家になりたいわけじゃありません」

夏だというのに、人ごみの中だというのに、全身が冷たくなつていく。

こんな言葉が自分のなかに隠れていたのか。

シークレットを当てたというよりは、異物を引き当ててしまった衝撃に、思わず立ち止まってしまった。

「見原って、いつから『私』呼びになったんだっけ」

長谷川はこちらの様子などおかまいなしに、さっきまでと変わらない軽い調子で話しかけてくる。

「おまえの、性別と年齢を考えるとけっこうイタイ『ボク』呼び、けっこう好きだったんだけどな」

「・・・私だつて、人を選んだ言葉の使い方くらい出来ますよ」

「無理すんなつて。っていうか、おまえの『私』呼び、違和感あつておれがキツイわ」

「そうですか」

「おい、だからそうやって早足で行くなつて」

ずんずんと、スニーカーで踵部分を地面に叩きつけながら歩く。もはや走っていると言ってもいい速度だ。

なんなんだこいつは。

八つ当たり？目的を達成出来ていない？

そうさ、そのとおりだよ。

ボクはここに来た目的を忘れてなんかいない。それなのにいつまで経っても「無料の家政婦」の域を出られないでいる。

イタイ？無理すんな？

知ってるさ、こんな年齢になつてまで自分の性別を忘れたかのように振舞うのが、いい加減おかしいってことくらい。

ワゴンセールから引つ張り出してきたようなＴシャツ、安いことだけが取り柄のＧパン、穿き古したスニーカー。ボクの服装は男子のようだというよりは、もはや「自分に個性がない」ことを認める際の予防線でしかない。ボクに個性がないのは、このセンスのない服装のせいだって、誰かに言い訳したいんだ。

わかっている。お祭りのために着飾った年頃の女の子たちの浴衣姿やおしゃれ着の中でみすばらしく浮いているってことぐらい。

でも仕方ないじゃないか。

染みついちゃってるんだ。服装も、自分の呼び名も、無理に直したって違和感が自分に残るだけだ。

言われなくたってわかってるんだから、いちいち指摘しないでほしい。

「あんたといるとイライラするんですよ」

「えっ？おれ、なんか悪いことした？」

人ごみの密度がどんどん濃くなっていく。長谷川はその身長が災いして移動しづらいのか、さっきよりずっと距離が開いている。ざまあみろ。

「あんたの方がずっと、うまいじゃないですか」

「うまいって、何が？もしかして料理とか？」

「絵に決まってるでしょうがっ」

人ごみのなかの何人かがうさんくさそうに振り向く。でも、どうでもいい。止められそうにない。

「あんたはボクの絵が面白いとかなんとか言って、自分より格下の人間を持ち上げて面白がってたんだ。そうだろ、面白いつて、そういう意味なんだろ。ボクだってバカじゃない。それくらい、とつくに気付いてんだよ」

がらがらと音を立ててガチャガチャが次々と出てくる。

透明な部分から覗いていた中身の正体は、呆れるほどに同じようなものだった。

嫉妬。劣等感。卑屈。

こんなものしかないのか。出てくる感情に失望しても、やっぱり同じものしか出てこない。

「さぞかし面白いだろうな、そういう人間がジタバタするのを眺めるのは。楽しくて仕方ないんだろ、バカみたいに沈んでるのが。あんたみたいに才能のある人間にはわかんないだろうけどな、どうしたらいいのか、わかんないんだよ。時間も環境も、恵まれ過ぎてるくらい整ってるのに、わけのわからないジレンマに捕まって絵の具を絞り出すことも怖くて出来なくなっただやっなんて、おやつにケーキを出してもらえなかったことに腹を立ててるマリー・アントワネットくらいに思ってるんだろっ」

あとどれくらいカプセルが残っているんだろっ。

開けても開けてもガラクタばかりなことは明らかなのに、出すことを止められない。

出しても出しても、このガラクタがボクのもとを離れることはない。剥きだしになった異物に自分が傷つけられるだけだ。

「笑えよ。こらえたらぶん殴る」

「おまえ、笑ってもぶん殴るだろうが」

「・・・やっぱり、おかしいんだろ」

「ばーか。おまえ、センスなさすぎ。なんだよ、ケーキを食べな

ったマリー・アントワネットって。どんな例えだよ」

「るさいっ。いちいち説明させんな」

「見原、おまえは勘違いをしているぞ」

長谷川は少しだけ、年相応の落ち着きを滲ませた声にトーンを落とした。思わず身構える。

「おれだって苦労してるんだとか、そういう不幸自慢は聞きたくない」

「そうじゃない。マリー・アントワネットはだな、ケーキではなく、バター付きのお菓子を食べたらどうだと言ったんだ」

いつの間にか隣に並んだ長谷川を見上げた。何を言ってるんだ。こいつは。

「もつと正確に言うとだな、そのバター付きのお菓子はブリオッシュと言っただな、原料はパンとなんら変わらないものだという説が有力だ。そもそも考えてもみる。いくら身分がすこぶる高いとは言っても、ドレスを纏った無力な女性が血走った民衆を前にしてそんな挑発的な発言をすると思うか？あのセリフは後に面白おかしく語られるうちについた単なる逸話だというのが今の学者の見解だ」

どうだと言わんばかりにうんちくを披露してくる無駄にデカい男を見上げて、ボクはさっきまでの勢いが見事に殺されていくのがわかった。

「そういうのって、やっぱり自分がマリー・アントワネットを口説けるようにと調べて得た知識だったりするんですか？」

「バカかおまえは。彼女はすでにいないだろ。おまえはおれをなんだと思ってるんだ」

「いや、ただの女たらしだと思ってますけど」

「おれが言いたいのはだな、マリー・アントワネットをあまり目の敵にするなということだ」

「ますます、わかんないんですけど」

だから、と苛立たしげに後頭部をがしがしと掻く長谷川は、いつものような軽いペースがなくなっていて、こっちまで調子が狂う。

「彼女は最後に首を刎ねられた。民衆はパンが食えなかった。でもおまえはどっちでもないだろ。彼女ほど恵まれていたわけでもなければ、民衆ほど同情されるべき存在でもない。羨むな。時間と労力の無駄だ。おいしいパンを食べられる手段を考えるべきだし、おまえは今までそうしてきたんじゃないのか。だからはるばるこんな離れた土地にまでやって来たんだろ」

さつきよりずっと小さくなった歩幅を往復する自分の、くたびれたスニーカーの往復運動を眺めていた。

とても長谷川の目を見る気になれない。

自分のなかに残ったカプセルが、自力でその蓋をこじ開けようとしている。

認めてほしい。

わかってほしい。

あまりにも幼稚で、だからこそ強いこの欲求が、長谷川の言葉に居場所を見つけて出てきてしまいそうだ。しかも、どういうわけか、涙という形で。

「やっぱり、あんた最悪ですよ」

なんとかそれだけ絞り出した。

これで、しばらくうつむいて黙っていても不自然じゃない。

「ふざけないでっ」

やかんが沸騰するときの笛の金切り声を思わせる叫びが、祭で賑わう人の群れを貫いた。

前を歩く人が立ち止まったので、ボクもぶつからないために止まる。背の高い長谷川は前の方を見て「あー」とどこことなく気の毒そうな声を出す。

「ありや、男女の修羅場だな」

長谷川の言葉に追従するようなタイミングで、男の声があがる。

「おい、落ち着けてっ」

「何なの、その人誰なのっ」

「やめろよ、場所考えろって」

人ごみが塀になって、当事者たちを直接見ることは出来なかったけど、状況はわかってきた。

「二股発覚、彼女マジギレ。彼氏はどっちを取るかな」

完全に他人事として楽しむことにしたらしい長谷川は、無駄にデカイガタイにむなしい活用手段を見つけてご機嫌だ。

「いやー、なんかかわいそうだな、ああいうの」

「それって、女の子の方ですか？それとも浮気のバレた男の方？」

女たらしの長谷川は曖昧に笑って答えない。女の敵。最低だ。

言葉の調子は強いものの、興奮しているせいか似たような語彙ばかり繰り返される彼らのやりとりには飽きたのか、しばらくすると止まっていた人の流れが徐々に動き始めた。

自然に、ボクたちも押し出されるようにその修羅場の、そこだけぽっかり空いたスペースに近づいた。

「これならおまえの身長でも見れるな」

長谷川がささやいて、そのデリカシーのなさに物申そうと隣に視線を移したときだった。

がつんつ。

視界がふさがれ、星が散る。

ぐわつと体が大きく傾く。

背中の真ん中あたりに固い衝撃がぶつかる。

それだけのことが、一瞬にして起きた。

「がつんつ」が痛みという電気信号だったこと、視界をふさいだ正体が女物の靴だったこと、背中にぶつかったのは、倒れかけたボクをとっさに支えようとした長谷川の腕だったことを知ったのは、もう少しだけ後の話だ。

「すみませんでした」

「いや、もういいですから」

近くにあった公園のベンチに腰掛けたボクと、さっきまで怒鳴っていたのが嘘のようにか細い声でしか話さない女の子と、定員オーバーで立つほかない長谷川。あまりにもシュールな組み合わせだ。

「いいの？さっきの彼氏、追いかけて」

無神経に声をかける長谷川を睨みつける。「傷をえぐるな」というアイコンタクトに、長谷川は「いや、これ大事なことだろ」と、やはりアイコンタクトで返してくる。

信じられないことだが、修羅場のクライマックスに、彼女は履いていた自分の靴を男へと投げた。

男は、これまた信じられない反射神経でそれを避け、代わりに後ろに突っ立っていたボクに直撃した。

彼女が予想外のことに驚いている間をチャンスとばかりに、男は人ごみに紛れて逃げてしまったのだ。

とりあえず見原は座れ、という長谷川の判断で公園に移動し、今に至るというわけだ。

「本当に、すみませんでした」

「大丈夫ですって」

さっきからずっとこんなやり取りを繰り返している。なんか、前にも似たようなことあったな。あのときはありがとう合戦だったんだっけ。

「あなただって被害者なんですから、そんなにかしこまられちゃうと、かえって心苦しいですよ」

すみません合戦を回避しようと、ボクはこれでもかとばかりに小さくなっている女の子に精一杯の笑顔を向ける。

「見原って、女の子には優しいんだな。それともさっきのショックの影響？」

「先輩は黙っててください」

ぴしゃりと跳ねのけ、再び隣に座る女の子の方に向き直って、言葉をなくした。泣いていたのだ。

「あーあ、泣かせてやんの」

ぼそつとつぶやいた長谷川の脛を蹴る。やっぱりスニーカーでよかった。充分な威力を込めることが出来た。

悶絶している長谷川を尻目に、必死に女の子に語りかける。

「あなたは何も悪くないんですよ。悪いのは全部、あの男なんですから」

女の子は首を振り続けた。それしか表現手段を持たないといわんばかりに、それは必死な仕草だった。

形のいい眉だ。彼女の切実な横顔を見て、ふいにそんなことを思った。

涙で流れているけど、ちゃんと丁寧な化粧もしてるし、服装だって可愛いワンプリースだ。彼氏のために、一生懸命時間をかけておしゃれをしたんだろう。

なんでこんなにいい子を裏切ったんだ。今さらながら、逃げ出した男に腹が立ってきた。

「本当に、ひどいやつがいるもんですね。最低ですよ。あんなの、別れて当然です。靴でもブーツでも、投げてやればいいんです。もし次見かけたら、ボ・・・私も投げますから」

ふいに長谷川がため息をついた。

なんだよ、何か文句があるのかとばかりに睨みつけようとして目が合って、驚いた。

ボクを見るその目に浮かんでいたのは、間違えようもない「憐れみ」の感情だった。

「やめてください」

唐突に、隣から棘のある声がした。

信じられない思いで、ゆっくりと視線を戻す。

「彼のこと、悪く言わないでください」

その棘が刺したのは、裏切って逃げた男にではなく、無神経な長谷川にでもなく、見当違いの親切で慰めることが出来た気でいた、マヌケなボクだった。

ごめんなさい、とまた吹けば飛ぶような声で彼女はボクに頭を下げた。

「あなたに当たるなんて、お門違いですよ。すみませんでした」下げた頭を一向に上げようとしない彼女に、ボクは「いえ、こちらこそ」と、ハリボテみたいに手を抜いた言葉を返す。

なんで？この子はあの男を怒ってないの？悪く言わないでって、どういうこと？

「いやー、こいつどうしようもなくバカで無神経なんですけど、悪気はないんですよ。許してやっちゃくれませんかねえ」

垂らした髪で表情を隠してしまっている彼女に、長谷川はいつもの人を食ったような調子で話しかける。

「ホレ、謝れ見原」

「・・・すみませんでした」

「どうして自分が謝んなきゃならないか、理由わかってる？」

長谷川は、イタズラをした小学生を諭す先生のように、ひたすら正しい存在としてボクをこてんぱんに打ち負かす。

「いえ」

声がかすれた。

「すみません、理由は、わかんない、です」

もはやうずくまっっていると言った方がいくらい、彼女は小さくなっでいて、真夏だというのに寒そうに自分を抱いていた。

彼女は、もしかしたらつややかに垂らした綺麗な髪に隠れて、涙を流し続けているのかもしれない。

彼女の名前が「小沢千佳」であり、ケイちゃんの友人だと知ることになるのは、もうちょっとだけ後のことだ。

ボクにわかったのはそれくらいで、彼女の棘の理由も、長谷川が目に見えなかったボクへの憐れみの理由も、自分のなかで答えを出せるようになるのは、さらに先のこと。

ケーキを食べられないアントワネット、迎えの来ないシンデレラ（後書き）

書くたびに長くなる不思議におののきつつ、まだ終わりが見えてこない現状に焦ります。そろそろ自分のティーンが終わるというのに・
・せめて今年のうちにハッピーエンドを迎えられるようにしたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7780u/>

ラストティーン

2011年11月8日01時08分発行